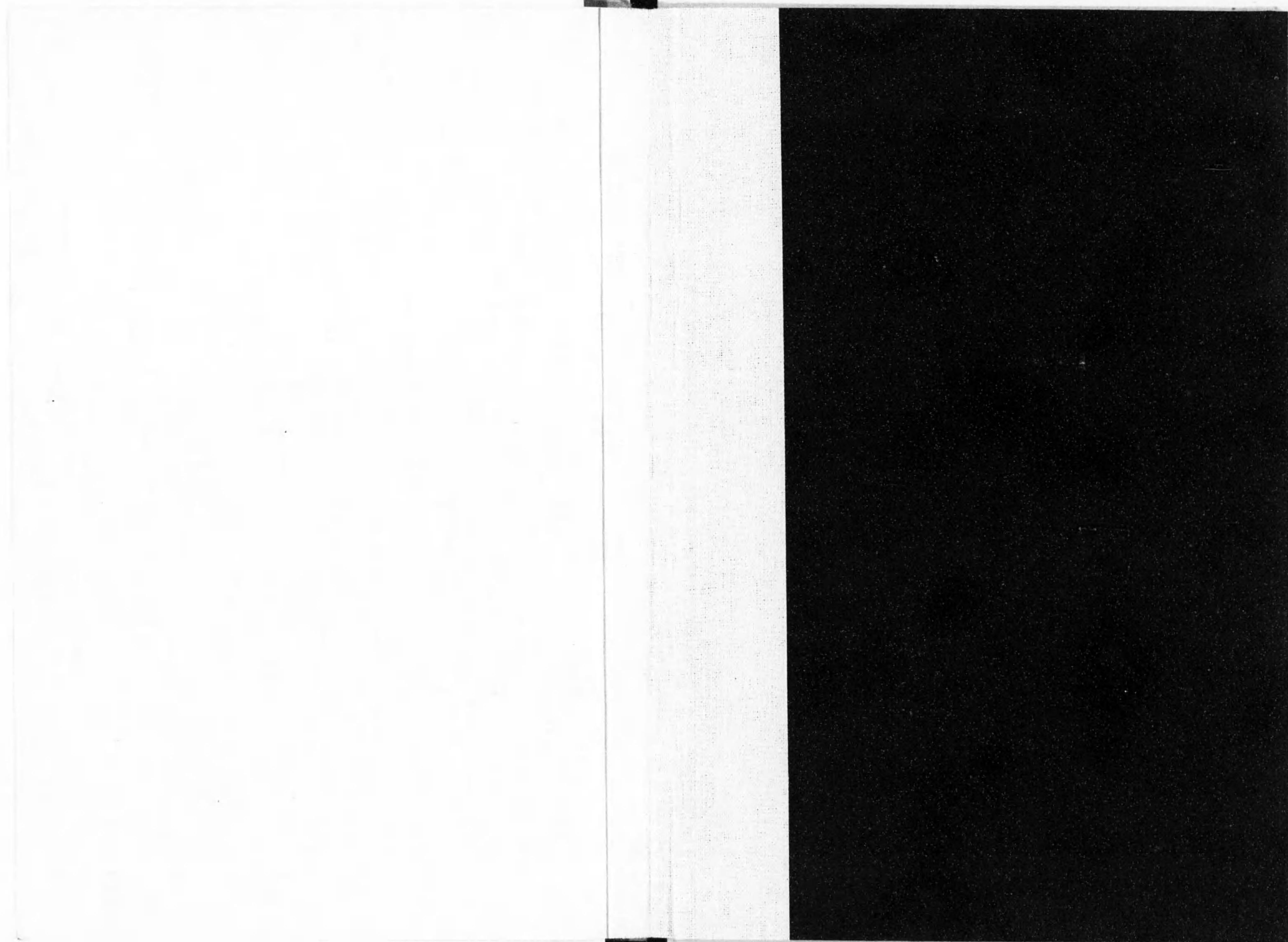


289
159



始





蘇峰 德富猪一郎著

西郷南洲先生

東京民友社發行

ZL6E59

井川花吉



世上毀譽輕似塵
人生白帶偽平真
追思孤島幽囚衆
不在今人在古人

右為仙翁詩
正生可意所

蘇峰 德富猪一郎著

西鄉南洲先生

東京民友社發行



(藏所氏德從鄉西 爵侯) 像畫生先洲南

6-

@ 289
159



1870

1870

人 愛 天 敬

南洲先生蹟



(藏所氏雄政來市) 蹟 真 生 先 洲 南

○刀槩之技懷怯心者無賴勇氣

無遺治無遲疑

○人心靈如太陽然但克什忘欲
雲霧四塞此靈烏在故誠
意工夫莫先於掃雲霧仰
白日凡為學之要自此而發
故曰誠者物之終始

○心之靈在於氣氣體之充
也凡為事以氣為先導則
拳體無失措技能巧藝
亦皆如是

○凡作事須要有事天之心不要

復禮

○獨得之見似私人驚其驟至
平凡之識似公世安其極自凡
聽人言宜虛懷而遠之勿苟
安極自可也

○讀經宜以我之心讀經之心
以經之心釋我之心不然徒爾
講明訓詁而已使是終身
不曾讀

如認游惰以為寬裕如認嚴刻以為
直諫勿認私欲以為志願

○刀槩之技懷怯心者血氣勇氣者敗必也。泯勇怯於一靜志。勝負於一動。動之以天。廓然太公靜之以地。物來順應如是者勝矣。心學亦不外於此。○無我則不獲其身。即是義。無物則不見其人。即是勇。○自及縮者無我也。雖千萬人吾往矣。無物也。

○心要現在事。未來不可邀。事已往不可追。終追終邊。便是放心。

○人貴厚重不貴輕。重尚真率不尚輕率。

○凡為學之初。必立欲為大人之志。然後書可讀也。不然徒貪圖見而已。則惑惑或恐長傲飾非。所謂假寇無資盜糧也可虞。

○無一息向新。無一刻急起。即是天地氣象。

○心靜方能知白日眼明。始會識青天。此程伯氏之句也。青天白日。常在於我。空揭之坐右。以警言戒。

○靈光充體。時細大車物。

無遺以治無遲疑

○人心靈如太陽。然但克伐。恣欲雲霧四塞。此靈烏在故。誠意工夫。莫先於掃雲霧。仰白日。凡為學之要。自此而起。故曰誠者物之終始。

○心之靈。在於氣。氣體之充也。凡為事。以氣為先。導則其身體。無失措。技能巧藝。亦皆如是。

○凡作事。須要有事天之心。不要有示人之念。

○著眼高。則見理不歧。

○士貴於獨立。自信。無依勢。附眾之念。不可起。

○爾想客感。由於志之不立。一志既立。百邪退。聽發言之清泉。涌出。濁水不得渾入。

○取信於人難也。人不信於口。而信於躬。不信於躬。而信於心。是以難。

○不可誣者。人情不可欺者。天理。人皆知之。然知而未知。

○學貴自得。徒以目讀。有字之書。苟於字不得。通透。當以心讀。無字之書。乃洞有自得。

○人皆知向身之安否。而不知向心之安否。宜自向。能不欺。爾室否。能不愧。余影否。能得安。德快樂否。時如是。心使不放。

○河水亦水也。一澄則為清水。客氣亦氣也。一轉則為正氣。遂客工夫。只是克己。只是復禮。

○獨得之見。似私人。驚其驟至。平凡之識。似公世。安其極。自凡聽人言。宜虛懷。而遠之。勿苟安。粗自可也。

○讀經宜以我之心。誦經之心。以經之心。釋我之心。不然。徒爾講明。訓詁而已。便是終身不曾讀。

如認游惰以為寬裕。如認嚴刻以為直諫。勿認私欲以為志願。

南洲先生真蹟

王家衰弱使人驚。忠義凝成腸鐵石。爲極爲礎築堅城。
百世忠義猶在。揚名爲極。爲礎築堅城。

王家衰弱使人驚。受憤捐身千百兵。忠義凝成腸鐵石。爲極爲礎築堅城。

(藏所氏光則藤安)

朝蒙恩遇夕被坑。人世浮沈似晦明。縱不同光葵向日。若無開運意推誠。
 洛陽知己皆爲鬼。南嶼俘囚獨竊生。生死何疑天附與。願留魂魄護皇城。
 獄中有感

南洲先生真蹟
 伯爵勝精氏所藏

(藏所氏精 爵伯)蹟真生先洲南

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

兄弟東西千里遠
 離姑且息却姑息
 不願多能願早歸

憶弟信吾在佛國

多

兄弟東西千里遠。今宵齋戒客星前。欲離姑息却姑息。不願多能願早歸。

(藏所氏德從鄉四 爵侯) 蹟真生先洲南

亡友南洲氏風雲定之翌

神亦存世物難消何與所

幸祈輔時一高士望之茶

國經有存叔城空矣孫也

孩稚以有身于物是此

世相誰能不感言望望

靈名千載乎已知之在在

也



勝

海舟先生真蹟 詠亡友南洲氏之詩古 (著者所藏)

詠亡友南洲氏

亡友南洲氏。風雲定天是。拂衣故山去。胸襟淡如水。悠悠事躬耕。嗚呼一高士。豈意秦國紀。甘受叛賊營。笑擲此殘骸。以付教弟子。致譽皆皮相。誰能察微旨。唯有精誠在。千歲存知己。

Blank page with faint horizontal lines and a vertical margin line on the left.

Blank page with faint horizontal lines and a vertical margin line on the right.

善摩人用我回中琵琶歌也

流音海一尺八弦在琵琶歌也

此乃由古已世の琵琶歌也

中今古の琵琶歌也

善の琵琶歌也

流の琵琶歌也

此乃由古已世の琵琶歌也

中今古の琵琶歌也

善の琵琶歌也

流の琵琶歌也

此乃由古已世の琵琶歌也

中今古の琵琶歌也

善の琵琶歌也

流の琵琶歌也

此乃由古已世の琵琶歌也

中今古の琵琶歌也

善の琵琶歌也

流の琵琶歌也

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in black ink on a light-colored background. The script is dense and flowing, characteristic of 18th or 19th-century cursive. The text is arranged in approximately 15 lines, with some lines starting with a capital letter. The overall appearance is that of a personal or official correspondence.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in black ink on a light-colored background. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Handwritten text on the left side of the page.

Main body of handwritten text, consisting of approximately 15 lines of cursive script.

緒言

西郷南洲翁は、實に近世日本の産出したる英雄男兒である。英雄男兒未だ必ずしも、醇乎として醇なる者ではない。玉にも瑕きずがある。然も瑕があつても、玉たるに妨げない。南洲翁として、決して完全無缺の人ではない。されど古人の所謂、過を見て仁を知ると申した通り、寧ろ其の缺點を見て、却て翁の人間味の饒おほさを知る。

本篇は、去る九月二十四日、(大正十五年)國民講堂に於ける予の演説の速記である。當夕の講演は、約三時間に互り、尙ほ言はんと欲する所の三分の一を剩した。然も本書は、飽迄講演速記の眞面目を保たんが爲めに、故らに増補しなかつた。而して言句の重複不整の如きも、餘りに甚だしきものを刪りたる外、修正を施さなかつた。

當時予の講演を聴く可く、地方より來り、滿員の爲めに、餘儀なく還られたる君子、決して少くなかつた。而して來聴せんと欲して、其志を果す能はなかつた君子も、亦多かつたと承る。是等の諸君子は、本書によりて、其の遺憾の若干を償ふとが出来るであらう。是れ予がつとめて講演の眞面目を、本書に留めんと欲する所以。

世に南洲翁遺訓なるものがある。此れは固より翁の談話を筆記したるものであらう。されど南洲翁は元來談論の士ではない。その筆記の如きも、聴者の氣持、聴者の感受如何によりて深淺がある。予は決して之を南洲翁の遺訓にあらずとは云はぬが、然も翁の説話を他人が筆記したるよりも、翁をして自ら語らしめ、翁をして自ら筆記せしめたる方が、より精確、より信馮す可きは、何人も疑ふ所はあるまい。されば予は、専ら翁の書簡、及び翁の詩を、根本資料として、

翁を研究する事とした。固より遺訓をも参照したるとは、云ふ迄もない。

翁の一代の勳功は、維新回天の偉業を翼賛したるに存す。而して其の首功に位するとは、天下の公論、何人も異辭がない。その論功行賞に際し、大久保甲東、木戸松菊の二君、何れも千八百石を賜はり、從三位に叙せられた。翁獨り二千石を賜はり、正三位に叙せられた。

維新の偉業の關鍵は、明治戊辰の武力解決の一點に歸す。而して之を畫策したる作者は、岩倉、大久保にして、之を決行したるは翁である。翁は一身を以て、實に朝廷の長城となつた。畏れ多くも 明治天皇は、實に維新の大御神で在し、翁は實に維新の猿田彦であつた。

次に擧ぐ可きは、廢藩置縣の英斷だ。此の一事は、維新回天の偉業を完成する

所以にして、當時其の實力に於て弱小なる中央政府が、強大なる諸藩を制馭するは、決して容易の業ではなかつた。然も翁は豫じめ天下に再度の大騒亂を惹起するの覺悟もて、此の難局に當つた。而して翁の決心の鞏固である丈それ丈、その難局は、却て平々に解決し去つた。

翁は決して無謀の勇者ではなかつた。されど翁の自から好んで居るは、黒幕でなく、狂言作者でなく、其の實行者であつた。此の如くして翁の一身は、山よりも重く、翁の一言は、鐵よりも強く、而して翁の一諾は、石よりも堅かつた。所謂る一身を擧げて、天下の安危に任ずる者、唯だ翁を然りとした。

世或は翁を以て、武斷黨の巨魁と云ふ。此れは大なる見當違ひだ。翁は固より武人を率ゐてゐた。されど翁を單に武斷者と爲すは、猶ほ岩倉、大久保諸公を以て、單に文治派と目するが如し。何れも間違である。翁は民政にも通じてゐ

た。「王を尊び民を憐むは、學問の本旨」とは、翁が自ら書して、私學校の綱領の一としたるもの。翁は世の所謂る武斷者でない。况や武愚者をやだ。

翁は道學先生ではない。されど道に於て深く得る所があつた。その證據は、本書に掲げたる翁の眞蹟の言志錄拔萃を見ても知る可く。

道を同じ、義相協ふを以て、暗に聚合せり。故に此理を研究し、道義に於ては、一身を不顧、必踏行へき事。

とは、翁の私學校綱領の劈頭に特筆したる個條ではない乎。翁は實に内省の人であり、修養の人である。其の陽明學と、禪學と、而して朱子學とは、深く問ふ所ではない。翁には門戸の見なく、其の善を擇んで、悉く之を攝取した。

予は窃かに思ふ、若し翁が單身朝鮮に使ひする故智を應用し、明治十年の初春、單身京都(當時 主上京都御駐蹕)に出て、正々堂々、廟堂の諸有司に向つて、

其の所見を陳べたらば奈何。是れ恐らくは翁として、最上の策であつたらう。而して翁が此の策に出ずして、健兒を率ゐ、兵を擧げて、上國を指して出掛けたのは、是れ騎虎の勢、止むを得ずして、下策に出でたるものであらう。然も、翁自らも下策と知りつゝ、之を行つたのであらう。勝海舟翁が、

只身一つを打ち捨て、若殿原にむくひなん——

と詠じたのは、恰も翁の心事を忖度して、その肯綮に中りたるものであらう。

* * * * *

されど翁は、此の極所に於てさへも、尙ほ再思の餘裕を剩した。

拙者儀、今般政府へ尋問之廉有之、明後十七日縣下發程、陸軍少將桐野利秋、陸軍少將篠原國幹、及び舊兵隊の者共隨行致候間、其臺下通行の節は、兵隊整列指揮を可被受、此段照會に及候也。

陸軍大將 西郷隆盛

明治十年二月十五日

熊本鎮臺司令長官

此れが最初の文書にして、今ま現に其の原書は、第六師團司令部に藏してゐる。

* * * * *

然るに翁は再考の上、之を不穩當と覺り、左の二書を認めた。

先刻及御報告候、熊本鎮臺えの御掛合は、御差出相成候哉、爲念御尋申上候間、否爲御知被下度御願申上候。以上。

二月十六日

西郷吉之助

大山綱良様

要伺

大山綱良は、當時の鹿兒島縣令であつて、固より南洲同志の一人だ。

先刻御引合相成候、肥後鎮臺に懸合之一條、縣廳間違にて掛合いたし候儀を申分け、早々御取消可被成下候。彌御掛合相成候は、何分の御知可被下候。其邊又々間違候得ば、先鋒之兵隊、如何之事變に及候哉も不

被_レ知候付、爲_レ念又々申進候。以上。

二月十六日

西郷吉之助

今藤 宏様

要用伺

今藤宏は、薩摩の學者にして、當時縣廳の重なる屬官であつた。

* * * * *

此にて見れば南洲翁は、最初の照會狀を、其の發送以前に取戻さんと欲し、既に發送したならば、更らに之を取消さんとしたのだ。然も騎虎の勢、到底致し方なく、餘儀なく南洲翁も虎に騎つたのでなく、虎に騎せられたのであつた。此の一點は、其の當時の政敵にして、多年の親友たる大久保甲東が、能く之を諒解してゐる。甲東が明治十年二月七日附にて、東京より在京都なる伊藤(博文)に與へたる書中の一節に

兼て御承知有_レ之通之氣質故、丁寧、反覆、説諭する流義に無_レ之、一握_{つかみ}に方

向を捻ぢ廻はさせ候例之方便上に出候譯にて、決而無名の輕舉をやらかす趣意に無_レ之と信用仕候。

と云ひ、更らに、

西郷に於ては、此一舉に付而は、萬不同意、縱令一死を以_{もつて}するとも、不_レ得_レ止、雷_{らいごう}同して、江藤、前原如き之同轍には、決而出て申まじく候。萬々一も、是迄之名節碎_{くだけ}て、終身を誤り候様之義有_レ之候得ば、さりとは、殘念千萬に候得共、實不_レ得_レ止、是まで之事に斷念_{つかまつるほか}仕_外無_二御座_一候。と云うてゐる。

* * * * *

尙ほ明治十年役の得失論に就いては、言ふ可き事が澤山ある。されど、それは西郷論よりも、寧ろ明治史としての問題とするを適當とするから、茲には省略する。

* * * * *

但だ一言の必要あるは、『勝てば官軍、負くれば賊』と云ふ文句は、維新前後流行したる合言葉であつたが、南洲翁は決してさる單純の思想者ではなかつた。彼は力即ち正義、勝利即ち善行と云ふ程に、力萬能宗の宗師ではなかつた。彼は本書にも詳説したる通り、大義名分を重んじた。然るに獨り十年の役に於てのみ、其の進退の際に、其の筋道を踏み違へたる趣おもひきあつたのは、何故であつたらう。其の部下から擁せられ、餘儀なく部下と情死したと云ふが、海舟を始めとして、一般同情者の語る所。予は固より之に反對するものではない。されど、それのみではない。但だ南洲翁が、明治六年の末、薩南に歸つてから、明治十年の初に至る、中間三年に於ける日本の大勢は、殆んど南洲等を後に殘して、進歩した。或る意味から云へば、南洲翁は不幸にして、時勢の落伍者となつた。而して此の落伍者たる結果が、丁丑の亂となり、併せて丁丑の亂に於ける南洲の失敗となつたではあるまい乎と思ふ。南洲翁は武力解決の手段を、明治十年の明治政局に向つて試みんと欲して失敗した。山師は山に斃れ、川師は川に斃

る。南洲翁の末路は、寧ろ悲慘である。

* * * * *

南洲翁の人物に就ては、

薩藩には西郷吉之助、爲ひとなり人肥大にして、御免の要石かまのいし(力士)にも、不劣、古の阿部貞任などは、如ごと此者かと思ひやられ候。此の人、學識あり、膽略あり、常に寡言にして、最も思慮雄斷に長じ、偶ま一言を出せば、確然人腸を貫く。且徳高くして人を服し、屢艱難を経て、頗る事に老練す。其誠實たけ武市いち(瑞山)に似て、學識あき有ことは、實に知行合一の人物なり。此則、當世ちやう洛西第一の英雄に御座候。

是れ土佐の傑士中岡慎太郎の評言にして、眞に慳々せいせい慳々せいせいを知るものと云ふ可きであらう。又た坂本龍馬は曰く、

初めて西郷に會す、其人物、茫漠として摸捉すべからず。之を大きく叩けば、大なる答を見、之を小さく叩けば、小なる答を見る。

と。而して勝海舟は之に附言して、「余深く此言に感じ、實に知言と爲せり」と云うてゐる。而して南洲と海舟とに至りては、兩者相許してゐる。固より予が茲に冗言を要せない。予は唯だ横井小楠先生が、南洲翁を評して、「西郷さんは何となく西行法師に似てゐる」と云うたのを、故米田子爵こめだから聞いて、流石にその高眼一世を射るに驚いた。南洲を以て西行に比す、如何にも比倫を失する様だ。されど其の無慾にして、脱俗遺世の高踏的風韻に至りては、期せずして一致してゐる。古人の『英雄回首即神仙』とは、此事であらう。

山縣含雪公は、容易に人に許さなかつた。長州の諸傑に對しても、其の推稱したるは、單だ高杉東行あるのみ。然るに獨り南洲翁に對しては、其の偉人たるを識認して、毫も吝やぶさかでなかつた。曾て語りて曰く、明治四年廢藩置縣の舉に際し、其の發案者諸氏、予をして南洲翁に向つて、其事を説かしむ。予翁を蠣殼町の邸に訪ひ、諄々として其の已む可からざる所以を語る。翁聽き了り、即

答して曰く諾と。予は餘りに其の返辭の容易なるに驚き、或は翁が予の趣旨を誤解したるにあらざるなき乎と、問ひ反した。然も翁は固より能く諒解してゐて、其の決心を言下に告げられたのであつた。予は此に於て愈々翁の及ぶ可からざる所以を知り、坐まろに崇敬の念に禁へなかつたと。所謂る「吉之助が一諾は、死を以て之を踐まむ」とは、文士の記する所、翁は斯る芝居が、りたる文句を吐く程の役者では無かつた。然も其の意味は、此の通りであつた。

予は曾て今春、洗足池畔に遊び、海舟塔と、海舟先生の建立したる南洲翁留魂碑とに詣し、偶然左の二十八字を口占した。

揚々錦旆壓關東。百萬死生談笑中。

群小不知天下計。千秋相對兩英雄。

眞に英雄は、國家の寶である。其の寶たる所以を知りて、之を尊崇する國民は、幸運の國民である。

大正十五年十月十三日正午 大森山王草堂 コスモス満開の處に於て

蘇 峰 迂 人

西郷南洲先生 目次

第一序 説……………一

第二 南洲翁と史的大観……………五

第三 歴史上薩摩の地位……………一〇

第四 生立より江戸出府前後……………一六

第五 維新前第一期の活動……………二六

第六 維新前第二期の活動……………三四

第七 維新大業と南洲翁……………三八

第八 南洲翁の本領（上）……………四七

第九 南洲翁の本領（下）……………六一

第十 征韓論と十年役……………七五

第十一 ユーモアと正直……………八二

第十二 結 論…………… 八六

挿入 寫眞 眞蹟

- 一、南洲先生畫像（侯爵 西郷從德氏所藏）……………
- 一、敬天愛人の四大字（市來政雄氏所藏）……………
- 一、言志錄及び其他手抄（西郷午次郎氏所藏）……………
- 一、王家衰弱使人驚の七絶（安藤則光氏所藏）……………
- 一、獄中有感の七律（伯爵 勝 精氏所藏）……………
- 一、憶弟信吾（從道）在佛國の七絶（侯爵 西郷從德氏所藏）……………
- 一、海舟先生の詠亡友南洲西郷氏の古詩（著者所藏）……………
- 一、海舟先生の琵琶歌（城山）（著者所藏）……………

西郷南洲先生

蘇峰學人

第一序 說

記念講演

今夕（大正十五年九月廿四日）西郷南洲先生の五十年記念に際しまして、一場の講演を致すことは、私におさまして無上の光榮と存じます。不肖私は何の仕合を以て、南洲先生の如き偉人について講演をするを得たる。誠に自分ながら冥加至極と存するのでございます。

私は此際に二つの事を申し上げて置かなければなりません。第一は、今夕私が南洲翁について申し上げますことは、私の南洲翁について考へて得た總てを申

第一序 說

二の事を申して置きたい

偉人は共有物
英國の皮

上げることは、とても出来ないのではありません。是が一つ。第二は、今夕私が申上げることは、今日までは私が此通りと考へて居るのでありますけれども、是が私の最後の定論と云ふのではない。私はいやでも應でも、近世日本國民史に於て、南洲先生の事は書くべきであります。それまでには少くとも、まだ三四年位の歳月は將來にあるのでございませうから、此間に尙私の今夕の意見に就て足らざる所があれば、訂正して見たいと思ふのであります。希くは皆様も亦私が申上げることで言ひ盡さない所は、他日に御期待を願ひ、又申上げた中において、あなた方が是は間違つて居ると云ふ御考へがございまして、たならば、或機會を待つて然るべき御教示を願ひたいと思ふのであります。是は私の事でない。偉人は御同様の共有物でありますから、吾々が之を評することは、何處までも公平に取扱はなければなりません。故に皆様方のお考へに依つて、吾々は至當至平、間違のないとを期して居るのでございませう。此頃英國の議會の中に於きまして、労働黨の面々が、バーナード・シヨウと申

肉屋の言

偉人崇拜と國民の健否

します文學者の七十の賀宴を催したのであります。其時のバーナード・シヨウの演説を讀んで見ますと、「先づ偶像崇拜と云ふことを止めて仕舞ふ。偉人英雄と云ふものを取除けて仕舞ふ。従つて大國民と云ふものを取除けて仕舞ふ。さうすれば吾々は誠に安全に暮せるものである」と斯様に申して居ります。シヨウは御承知の通り、世界に名高き皮肉屋である。此人の言ふことを其儘取つて議論をすれば、又何か、より大なる皮肉を彼より浴せかけられるに相違はないのでありますから、私が態々東京の國民講堂で、シヨウの言葉を相手に攻撃するのではないが、何れにしても、吾々はさう云ふ考へは持つて居ない。國民が其國の偉人、其國の豪傑、さう云ふ人々を尊敬し、嘆美し、従つて崇拜することの出来る間は、其の國民はまだ血が通つて居る國民である。他にいろ／＼弱點があつても、缺點があつても、醜態があつても、幾らか取柄のある國民である。併しながら偉人を偉人とせず、豪傑を豪傑とせず、崇拜、嘆美、稱讚、羨慕と云ふやうなことを、一切除外してしまふやうな國民になつた時には、最

南洲翁を慕ふ熱誠の現はれ

早是は濟度し難きものであると思ふ。所が今度西郷南洲翁の五十年祭と云ふことになりますと、不肖私共が企てましたことでも、天下の識者、天下の志士、若くは吾々と趣味を同じくし、思想を同じくして居る所の方々が、期せずして相會し。現に昨日以來、青山會館における所の南洲翁遺墨展覽會の盛んであると云ふことは、私の吹聴を待たず、御列席の御方々が御承知の事と存じて居る次第であります。是は何を意味するか、私は、南洲翁が人望があると云ふばかりでなく、其の南洲翁を慕ふと云ふ國民の心が、實に有難い。斯う云ふ心がある間は、日本はまだ一丈夫である。是が無くなる時には、恐らくは國が亡びる時と思ひます。そこで私は是から、歴史の上から南洲翁を觀察して見たい。

風袋を除いて歴史を映した南洲翁

第二 南洲翁と史的大觀

成る程南洲翁は偉い。併しながら歴史上から之を見れば、餘程偉くても割引をしなければなりません。割引をしても偉いから本當に偉いのである。割引せずには偉いのは、全く風袋である。それで私の話は、西郷南洲なるもの、風袋を悉く取除けて、之を眞裸體にする。即ち恰も徴兵検査の時に、検査官が壯丁を裸體にして見る如く、私は失禮ながら南洲翁を裸體にして見たいと思ふ。「お前は何の權威を以てさう云ふことをされるか」と御訊問になつたならば、私は只一言、歴史家としてさうするのであると、お答するより外にはないのであります。

南洲の偉業と時場所人

歴史上の觀察點から西郷南洲翁を見ますと、偉いは偉い。併しながら南洲翁は偉い事をするやうな時を得てゐる。又偉い事をするやうな場所を得てゐる。又偉い事をするやうな人を得てゐる。此の時と此の場所、此の人と云ふ三つ

時を得た理由

は、確に南洲翁の持つてゐる最も大なるものであつて、先づ此三つを割引して見なければ、本當の南洲翁の價値は分らない。

假りに南洲翁をして今百年前に生れしめたならばどうかであるか、南洲翁は幸にして嘉永、安政の間に壯年時代を、慶應明治の間に中年時代を送り、明治十年は既に人生五十と云ふ時になられたのである。若し之を百年昔に持つて行く時に於ては、南洲翁はどうであるか。一百年前乃至二百年前に生れしめたならばどうかであるか。南洲翁が元祿時代に生れたならばどうかであるか、南洲翁が寶曆、明和時代に生れたならばどうかであるか。恐らくは、幾ら南洲翁が偉い人であつても、彼が如き功業を立つる機會はなかつたであらうと思ふ。公平に申して見れば、徳川の治政二百六十年の間に於きまして、随分偉い人があつたであらう。併ながら、その偉い事を行ふことが出来なかつたのは何であるか。時が許さなかつたのである。其點から申しますと、南洲翁は實に時を得たものと申さなければならぬ。

場所を得た理由

それから場所である。是が非常に重大だ。若し南洲翁が維新の風雲に際會しても、鹿兒島に生れず、假へば對州に生れたならばどうかであらう。必ずしも對州がつまりらない所で、鹿兒島が偉い所とは思ひませぬけれども、若し對州に生れたならばどうかであるか、或は平戸に生れたならばどうかであるか。同じ九州にしても、豊後の小藩に生れたならばどうかであるか。之を考へて見ると、南洲翁は實に好い場所に生れた。今日の世界に於ても、時を得ずして損をする人も、場所を得ずして損をする人もある。現に諸君御承知の通り、今日も新聞に出て居る所の、ギリシヤのベネゼロスの如き人をして、若しギリシヤに生れしめずして英國に生れしめたならばどうかであるか。私はポールドウキンなどと云ふやうな人には、どう云ふ力があるか知りませぬが、ベネゼロスをして英國に生れしめたならば、途方とてつもない事をやつただらうと思ふ。又セルビアのパンツチの如き人をして、或はドイツ、或はフランスに生れしめたならばどうかである。之を思へばビスマルクがプロイセンに生れずして、若し彼をバルカン半島の小

場所を得た人々

さな國に生れしめたならば、果してビスマルク程の仕事が出来たか否やと云ふことを、疑問とせざるを得ないのであります。近く申しますれば、朝鮮における李完用君の如き人を、朝鮮に生れしめず、對馬海峡を渡つて長州にでも生れしめたならばどうであるか。恐らくは此人も、非常なことをした一人となつたかも知れぬ。

鹿兒島と云ふ背景は強味大なる

斯の如く腕はあつても場所がなく、止むを得ずして小さな所で、小さな働きをして、其儘朽ち果て、しまふ人がある。總理大臣となしても餘ある器を持つて、村長に朽ち果てる人もあり、時としては村長より勤まらぬやうな男が、間違つて總理大臣になるやうなこともある。世の中の事はいろいろの事がありますが、我が南洲翁に於ては鹿兒島と云ふ背景を持つて居る。それが一つの大きな強味であります。

人を得た理由

それからもう一つは人である。水滸傳中、吳用と云ふ人が曰うた言葉に「人多くして做し得ず、人少くして做し得ず」と云ふのがあります。唯無茶苦茶に澤山

三言

就中場所大の力最も

の人が議論ばかりしてゐても、何にも出来ない。又一人では何にも出来ない。必ず適當の仲間が必要であると云ふのである。然るに我が南洲翁は如何なる仕合せであるか、實に其人を得たのである。其人の中で最も主なる人は、南洲翁を引出す時に於ては、薩州あつて以來——日本とは言ひませぬ——恐らく薩州關關以來、其比を見ざる所の齊彬公が在つた。又齊彬公の亡くなられて以來は、大久保甲東と云ふ、實に相手に申分のない人を持つて居る。初の相手は主君である。後の相手は親友である。斯の如き相手を持つて居られたので、特に西郷南洲翁は、自分の力を精一杯伸すことが出来た。斯く申上げて見れば、時も宜い。場所も宜い。人も宜いと云ふことは間違はない。此中に於て最も南洲翁をして、仕事を爲さしめた所のものは、第一でもなければ第三でもない。第二の所謂薩州の勢力と云ふことである。茲に私は少しく薩州の事を申上げなくてはならない。

第三 歴史上薩摩の地位

薩摩と九州一帯の覇権

極く短く申上げますが、薩州の日本における勢力は、歴史家として見れば、實に研究に價するものである。兎に角島津義久、義弘、此の兄弟が九州を従へて覇権を占めたと同時に、秀吉が来て、其の勝利の大半をもぎ取つてしまつた。だから薩州の力は、若し秀吉が来なければ、當然九州全體に伸ぶのみならず、琉球は勿論、或は其力を朝鮮に持つて行き、或は其力を臺灣に持つて行き、あの附近に一つの帝國を造つたかも知れない。——帝國と云ふ言葉は、是は西洋の言葉を翻譯したので、或一つの領土を造る意味である。固より日本の天皇陛下の下である。決して薩摩が獨立國を造る譯ではないのであります。所がややかけた鼻先に秀吉が来て、大きな風呂敷を被せてしまつた。其時には鹿兒島はまるで猫に頭巾を被せたやうである。其猫は誠に偉い。猫ぢやない實に虎である。だが虎が頭巾を被せられて、遂に大きな猫になつたやうな形勢である。併

秀吉の風呂敷

虎に頭巾

し本来虎であるものが、秀吉の頭巾を被つて猫となつたのであるからして、一度は虎の本性を出さなければならぬ。それで何時出すか、と、少し宛出しかけたのである。

酒川の戦を關原の戦に王政維新の勢を新に露

家康の神體西に向ふ所以

其出した一つは朝鮮における役の酒川の戦である。他の一つは關原である。併ながら其どちらも慊らず、其の勢力はズツと残つてゐた。是は何時か一度は機會を見て爆發すべき所のものであつて、其力が遂に三百年續いて維新の時になつたのである。歴史家から見れば、薩州の力が王政維新の時に伸びたのは、龍伯公や、維新公がやつた所の其力が残つて、それが其時には燃え切らずに、段段潜勢力となつて、遂に維新の時に爆發し來つたのである。それで徳川では、初から薩州を腫れもの扱にし、薩州の方からも徳川が好きでないから、徳川の方からも、無論薩州を好く氣遣ひはない。所謂兩方から怨を匿して友として居つたのである。何時かと思ふけれども、さう云ふことは、あくびにも見せずして、互に親しくして來たのである。而も徳川の方では、イ

ザとなれば、必ず薩摩が謀反するものと思つて居つた。家康公が死ぬる時にも、久能山に祀る時には、『自分の神體は西に向けて置け』と云つた。西と云ふのは誰か。島津か、毛利か。或は毛利、島津の兩方か。何れにしても其れ等である。家康の方からも西を向いてゐるからして、薩摩の方からも東を向いてゐると云ふことは、當然のことである。

近松の眼に映じた薩摩人

そこで、薩摩の武を練ると云ふことは、必ずしも關原の遺恨を晴す爲ではない。本來、薩摩隼人は勇武のものである。徳川の文化が爛熟した時においても、薩摩人だけは、先づ別物で、例へば近松の浄瑠璃の「おまん源五兵衛」と云ふ薩摩歌の中にも、『抜くと鞘を敲き破り、再びさゝず死ぬるが是れ正銘』と斯う言つて、抜くと鞘を叩き割り、再びさゝぬが是は薩摩の流儀だと、斯う云ふことを言つてゐる。

雨森芳洲の眼に映じた薩摩人

それから、それより少し後にも、享保頃雨森芳洲と云ふ學者が、朝鮮人との問答がある。『生を好み死を惡むは人の情也』日本人奚ぞ獨り然らざらん。但し薩

一體の空氣然り

薩摩の武勇は少くも東洋的

摩州民俗自ら別、事に遇へば輒ち死す。身を殺して仁を成し、生を捨て、義に就くは、君子の難んずる所、而して薩摩州、則ち人々此の如し。『誰でも死ぬることは嫌ひだ。日本人でも素より死ぬることは嫌ひである。但し薩摩州は別だ。』事に遇へば輒ち死す。輒ちと云ふ字は容易く死す、たやすくと云ふ字です。『身を殺して仁を成し、生を捨て、義に就くは、君子の難んずる所、而して薩摩州、則ち人々此の如し。』死ぬるとは、薩摩人は何とも思つてゐない、と云ふことを申してゐるのである。是は幾らか掛値がある。幾ら薩摩人でも、腰拔もあり臆病者もある。何處でも同じ事である。薩摩ばかり臆病者が居ない筈はない。併しながら一體の空氣がさうであつて、腰を抜かしたり、臆病をしたりすれば、仲間から排斥されるから、臆病者も腰拔も、腰を抜かすことが出来ないといふ、濃厚な空氣になつたと云ふことが言はれる。それで薩摩の武勇と云ふものは、決して地方的でもない。日本的でもない。世界的——少くとも東洋的に擴がつてゐる。明の歴史を見ると、石曼子——石曼

子と云ふのは島津と云ふことで、石曼子^{しきまご}は怖いものとなつて居る。泗川の戦^{しせん}と云ふものは、實に徹底的に薩摩の武力を東洋に示したものであつて、其の薩摩の武力が日本内地に徹底したと云ふよりも、寧ろ支那人に深く徹底してゐる。斯の如き武力を以て立つた所の國が薩摩である。其の薩摩にも、いろ／＼の歴史があり、變化があるが、兎に角其の薩摩を背景として立つた所の西郷南洲であります。

背景が立
派なら南
洲は更に
立派

併しながら、それ程偉い薩摩であり、それ程俱にする人があつたとしても、若しそこに南洲と云ふ其人がなかつたならばどうであるか。西郷南洲と云ふものでも居らなかつたならば、乃公が南洲の代りをしてやると云ふ人が、一人や二人あつて宜かりさうなものであるが、どうもさう思へない。矢張り天にも、地にも、何と言つても南洲は一人より外居らない。丁度エリザベス時代に、シエクスピアが居らなければ、乃公がシエクスピアの代りになつてやると云ふ文學者

南洲の外
に南洲な

があつたかも知れないけれども、どうしてもシエクスピアは一人より外居らない。それと同じ事で、南洲は一人より外居らない。茲に即ち南洲の南洲たる所があるのであります。是から私は、一通り南洲の履歷を述べ、次に南洲に就て私の考へた所の要點を、申上げて見たいと思ひます。

第四 生立より江戸出府前後

南洲翁の
姓系と生
年月日

西郷家は、肥後菊池家より出たと云ふことである。元祿の比、初めて島津家に仕へ、其の家格は小姓組である。南洲翁は、文政十年十二月七日に生れた。是は若し新曆にすれば、文政十一年一月二十三日となるのであります。南洲翁が五十一歳で死なれたと云ふのは、舊曆の數へ方であつて、新曆で數へれば五十歳で死んだ。満五十歳ぢやない、四十九歳八ヶ月と云ふ位のものである。兎に角南洲翁は、翁と申します程ぢや、餘程の老人だらうと思ふけれども、斯く申す演説者よりも、南洲翁が死なれた時は、まだ十四五歳若かつたのである。翁と云ふ點から申しますと、此の演説者の方が餘程大きな翁であります。それで十八歳から、郡方書役の助役をせられた。十八歳から二十八歳まで、約十ヶ年の間は、南洲翁も郡役所の書記か、收税署の助手かと云ふやうなことをして居られた。彼が筆算に巧者で、民政に通じたのは、此間の習練の結果であ

少壯時の
下級吏員

南洲翁の
修養時

南洲翁の
性格を露
はす手紙
の書體

る。十年の歲月は此の英雄兒に取りては、決して等閑ではなかつた。二十三歳二十四歳の頃、鹿兒島では所謂の高崎崩れるものがあり、近藤、高崎、山田、赤山の志士、それぞれ節に死した。二十五歳の時分から近思録を読み、陽明學を講じ——陽明學は伊東茂右衛門、禪學は無參和尚と云ふやうな譯である。其の時分は大久保、長沼等、其時の人々と一緒にやられた。而して此歳に、恰も齊彬公が襲封せられた。最早南洲翁等の出世の時節が近まつて來た。それで、南洲翁の書かれた手紙を皆さん御覽になると、實に字がお家派で、圓くして、奇麗で、何とも云へない好い感じのする手蹟を書いてゐる。アレは書役をして、帳面を附けたり、書類を申達したりすると、叮嚀にやられたからである。丁度孔子様が、羊飼ひになれば好い羊飼ひになり、書役になれば好い書役になり、會計の役人になれば好い會計の役人になつたと云はれた通り、南洲翁はさう云ふ所において、最善の修養をなし、努力をされて居たものと思ふのであります。

初めの
江戸行

もう廿六歳頃から南洲翁の友人、大山、樺山、有村諸氏は江戸に出てゐる。自分は江戸に出たくて堪らないと思つてゐるうち、廿八歳の時、頃は安政元年甲寅の正月中、小姓となつて、齊彬公のお供をして江戸に出たのである。是が南洲翁の出世の始まりであります。さうして水上坂の途中で、齊彬公に初めてお目見え致した。

明主齊彬
公に見出
さる

天は眞に仕合なものを南洲翁に與へたのである。誰が見ても、十人が見ても、百人が見ても、千人が見ても、あの人が西郷翁かと云ふことに氣のつくやうな容貌である。南洲翁自身は、自分を宣傳するやうな人ぢや決してない。近頃流行る自己宣傳などと云ふことは、非常に嫌ひである。人のすることも嫌ひ、自分がすることは尙更嫌ひ、即ち最も宣傳嫌ひの人であつたが、天が南洲翁を非常に宣傳するやうな身體を與へたのである。何處に行つても自分は豪傑振らなけれどもが、豪傑の容貌、風采、態度を與へて呉れた。決して南洲翁が自分自ら大きな眼を拵へたのぢやない。生れながら大きな眼である。魁偉の容貌、

天成の人
豪

堂々の幹軀、齊彬公一見して是は普通の者でない、お考へになつたらうと私は推察する。それから安政二年四月、江戸において初めて戸田やら藤田等に、小石川の邸で會はれた。南洲翁が藤田東湖に會つて非常に感化を受けたと云ふ説と、又それ程のことはないと云ふ説と、いろいろあります。併ながら南洲翁と云ふ人は不思議な人で、人の善い所、美點と云ふやうなことに就ては、非常に印象が深い。世の中には絶對不感服と云ふやうな人と、何事にも感服する人と、或事には感服し、或事には感服しないと云ふ人と、自から二通りある。併し二つに類別すれば、善い事でも、悪い事でも、一切感心せないと云ふ流儀の人もあり。難癖をつけて、何でも彼でも、詰らなく言ひ爲す人がある。又詰らないことは詰らないとしても、善い事には何處までも感心する人がある。南洲翁は何れかと云へば、人の善に服する人である。人の美點に服する人である。是が南洲翁の一生に取つての一つの大なる美德であると私は考へてゐる。それで藤田東湖に

南洲東湖
初會見

南洲翁人
の善に服
するの徳

藤田東湖の人物

會はれた時には、無論東湖に傾倒されたに相違はない。藤田東湖と云ふ人の事を申しますと、議論が傍徑に入る。東湖はどう云ふ人であつたか、私は東湖の評は、東湖の御主人の、水戸の烈公が言はれたことが、一番當つて居ると思ふ。其評は『彪は誠に才子である』と斯う言つた。彪とは東湖の名である。烈公は藤田東湖を才子と見てゐる。才子と云ふ字にも輕薄才子と云ふ、輕薄と云ふ二字の形容詞がつくと、又た所謂天下の奇才と云ふ方の才子と二つある。東湖は輕薄ぢやない。奇才の方の才子であるが、兎に角是は大の字を加へて大才子と云つても宜い人である。大才子でありながら才子らしい風はせずして、一見豪傑のやうに見えたのである。併ながら、此人は何れかと云へば非常な才子である。才子と云ふのは詰らないと云ふのぢやない。『聰明才辯是第二等資質』と云ふとを、昔の人が言つて居りますが、是は實に立派な人物の資格である。

大才子

西郷南洲と東湖と比べて見れば、是は比較論になりますから、今此處で申す

才子肌と豪傑肌

必要はないが、兎に角資格を言うて見れば、西郷南洲は才子ではない。是は矢張り豪傑と云ふ人である。東湖はどちらかと云へば、寧ろ才子肌の人であつて、豪傑の香のする人である。さう云ふ譯であつて、また其時では二十九歳、本當の年から云へば二十八歳である。今日では晩學の者ならば、また大學にウロついてゐる時です。さう云ふ譯であるからして、田舎者の西郷先生が、スレッツカラシの東湖先生に會つて、話を聞いたから、感心したに定つてゐる。それに藤田東湖は、實に應對の爽やかな人で、未だ物を言はないでも、會つた人の心はスツカリ見抜いて行くと云ふやうな人である。流石に聰明才辯を以て一世に名高い横井小楠の如きも、一見して東湖に傾倒した位である。それ故に南洲先生も敬服した。其事もいろいろ書いたものがあります。其時に南洲先生は江戸において――水戸を中心として、或は越前の矢島錦助、肥後の津田山三郎、柳河の池部藤左衛門、斯う云ふ人々が皆集まつて、いろいろ講習討論をせられた。何時の間にか西郷先生は田舎の書役から、天下の志士

小楠と東湖

一躍天下の志士

南洲翁庭
方役とな

となつて居られたのである。さうして其時には、既に庭方役になつて居られた。庭方役と申しますのは、所謂庭に出て殿様と會ふ。社祓をつけて、表向きにたゞ拜謁すると云ふのでなく、庭において殿様に拜謁が出来るやうな、誠に近しい所の關係を持つことの出来るもので、真中に第三者を置かずして、直接殿様の御意を伺ふことが出来るのである。此の如くして南洲翁は、直接に齊彬公の御用を承はることゝなつた。

安政地震
と藤田戸
田の死

彼れ此れして居る中に、安政二年十月四日に大地震があつて、御承知の通り戸田も藤田も、二人とも死んでしまつた。西郷南洲翁は此の水戸の豪傑を中心として、天下の志士と圖つて、いろ／＼是から働かうと云ふ時に、此の二人が一時に倒れた。其時の手紙があります。

誠に天下の大變にて水戸の兩田もゆり打に被レ逢、何共無ニ申譯ニ次第に御座候。頓と此限にて何も申口は無ニ御座候、御遙察可レ被レ下候。

とある。『頓と此限にて、何にも申す口はござりませぬ。』——餘程力を落された

橋本左内
と會見

ことが判る。

それから十二月廿六日に、橋本左内に遭つた。彼はまだ年は二十を漸く越したばかりの、白面の書生であつたが、中々偉物であつた。當初は翁も相手としなかつたが、其の議論を聽いて、乍ち此人にも非常に敬服せられた。

御家騒動
に死を覺

それから其の時分に、いよいよ死ぬると云ふ決心をされたことがあります。それは薩摩の所謂お家騒動の一件です。兎に角鹿兒島と云ふ所は、纏つた所とあなた方お考へになるお方がありませうけれども、それは他藩に比ぶれば、纏まつたことも多いのである。併ながら、内輪の騒動は中々昔からあつた國である。決してないのぢやない。現に太閤が攻めた時にも、平和論と、戰鬪論とがあつた。又た朝鮮征伐の時にも、義弘公は先方に行つてしまはれたが、國內ではまだ議論があつて、なか／＼やかましかつた。あの英雄の義弘公をして、殆ど泣くやうに苦しませめた。鹿兒島は何時でも一致してゐる。鹿兒島人はまるで羊のやうなものであつて、羊飼が鞭を一つ振れば、皆な跟いて來ると云ふ

正義派として起つ

お嫁入仕度方を命ぜらる

のぢやない。羊の中にも東に行かうと云ふ羊と、西に行かうと云ふ羊と、時々分れることがある。現に南洲翁の出らるゝ以前にも、川上くづれ、秩父くづれ、それから前に申した高崎くづれと云ふやうな、いろいろの事がある。而してどちらかと申しますれば、西郷南洲や、大久保甲東の方々は、矢張り高崎くづれの一黨の人々である。其方から云へば所謂正義派の人々である。それで高崎くづれの結論と云ふ譯ではないが、南洲翁などが、お家騒動の元兇と見らるゝ所の或婦人を、生かして置いてはいかぬと云ふ考で、命を捨て、かゝらうとしたことがある。それも聰明な順聖公がそれを察して、それはいけないとお留めになり、又謹んで其の命を奉せられたと云ふやうな譯であります。それから安政三年になりましては、順聖公の養女で、それが又た近衛家の養女として篤姫と云ふお方が、徳川將軍家定公の御臺所としてお嫁入になつて、其お嫁入の仕度方を、南洲翁が命ぜられた。是が即ち御一新の時まで居られた天璋院様と云ふお方である。是も偉い女性である。

長岡是容との交際

それから四年四月國に歸つて、其の十一月四日には熊本くまもとの長岡是容ながおかこれよし、此人と交際かうさいした。此人にも南洲翁は、深く感心かんしんせられた。それから安政五年は、即ち有名な戊午ごごの年である。「欲知世運興隆節。神武東征戊午年。」と云ふ日下部伊三次の詩があります。此年はなか／＼やかましい年である。

第五 維新前第一期の活動

安政五年
齊彬公の死

安政五年には、南洲翁は齊彬公の意を含み、橋本左内や何かと提携して、一橋公を將軍の世嗣に立てるといふ運動を、非常にやつて居られた。所が五月には、井伊直弼が大老となり、六月鹿兒島に歸つて、七月に上京され、京都に來られると、廿四日に齊彬公が亡くなられたと云ふ報知を聞かれた。井伊直弼が大老となつて、齊彬公が其の後如何なる仕事をされる積りであつたか。西郷南洲に如何なるとを申附けられたのであるか。南洲翁も居らない、齊彬公も居らない、

南洲殉死
を覺悟し
て止む

それで是は聞くとは出來ない。併ながら齊彬公の胸中には、驚天動地の大經綸があつたと信すべき理由がある。但だ是は最早致方はない。南洲翁はもう致方がない、殉死しようと思つて、たうを極め、既に死を決せられた。併しそれも思ひ止まる可き事情があつて、たうとう月照和尚を伴うて國に歸つて、其の十月の十六日、薩摩瀧大崎ヶ鼻の沖で、

薩摩瀧の
再生と冥
冥の天意

相抱いて海に投せられた。其の顛末は殆ど一部の劇よりも面白いが、それは姑らく申しませぬ。

若し是で死んで仕舞はれたならば、是でも南洲翁の一代の歴史は、ちやんと立派なもの、纏りが附いてゐるのである。もう是で一通りの事は出來てゐる。大概ならば是で打切つてもよいけれども、どうしても王政維新を、此の男の手でやらせようと云ふ、是は誰の考か、迎も我々の想像し能はざる所、不可思議方で、——月照和尚は息は絶えたが、南洲翁は息を吹返した。『相約投淵無二後先』。豈圖波上再生縁。回頭十有餘年夢。空隔幽明一哭墓前。』と、自分にも生きる積りで月照和尚と死んだんぢやない。自分は死ぬる積りで相約して投じたのであるけれども、息を吹返したのである。天がどうしても殺さない。此男を助けて置かなくては、明治天皇の偉業が出來ないと云ふとを天が知つて、どうしても殺さない。歴史の上に於ても、どう考へても理窟で解けないことが澤山ある。い、ころ加減の歴史家などと云ふものは、解けない理窟を、勝手に自分

歴史上の
深秘

大島寛流
と二大意

流されたのは、まるで井伊の力の及ばない所に、ちやんと南洲翁を保護したやうなもので。あの島流しは、一面から見れば南洲翁の人物を養ひ、一面から云へば、南洲翁の生命を安全ならしめたと云ふ意味に於て、何れに於ても、是は感謝すべきことであつたのであります。

文久二年
大島へ迎
ひの船

世の中が愈よ多事となり、南洲翁を必要とする所から、文久二年正月十四日に迎へるの船が大島に来て、南洲翁は二月十二日鹿兒島に著し、其の翌日十三日には、大久保甲東、中山仲左衛門と相會し、大に時局を論じた。其時には久光公が、順聖公の遺命を奉じて京都から江戸に行つて、——京都の方で一橋公を將軍の後見職と爲すと云ふ勅旨を得て、之を幕府に奉せしめて、茲に公武合體の實を擧げようとした。即ち其の運動員として、西郷南洲翁を呼び返された。所が南洲翁はそれに反對をして、先づ露骨に申しますれば、さう云ふ大きな仕事は、順聖公なら出来るけれども、三郎さんはジゴロで——薩摩の言葉でジゴロと云ふのは田舎者と云ふのであります。——所謂其の天下の大勢、世

南洲久光
公をジゴ
ロ視す

一先づ馬
關に行き
馳て上京

久光公の
激怒に逢

間の風潮を知らないあなたがらしつたつて、到底いけるものぢやない。おしなさい。天下の大事は、とても三郎公や何かを相手に、出来るものぢやないと云ふ考が頭にある。それでいろ／＼議論をされたのであるが——此事は他の機會で申します——それで議論分れになつて仕舞つた。そこで翁は足が痛くて困るとか云ふもので、十七日から温泉に行つた。するとそれでは兎に角浪人共が騒ぐから、それを抑へる爲に先發して、先づ馬關まで行つて居つて貰ひたいと云ふ話であつた。それならばと云ふ譯で、三月十三日に、村田新入を伴うて立つた。馬關に著いて見ると、上方の騒ぎが中々大きいから、是は逆も馬關にゐては駄目だと思つて、上方に行き奔走して居られた。すると四月九日に、兵庫に於て大久保甲東が後からやつて来て、西郷南洲を靜處に引張り出して言ふには、「大變なことだ。お前さんが若い者を煽動して亂暴をさすると云ふやうな事になつてゐる。三郎公が非常な御立腹で、逆もよりつけた話ぢやない。もう是では致方がないから、此處で乃公とお前さんと一緒

南洲徳ノ島へ流さる

に死なう。刺し違へて死なう」と言はれた。さうすると南洲翁が言はるゝに、「二人死んでは仕方がない。乃公は兎も角も、お前さんは生きて居つて貰はなくては、逆もいかぬ。それぢや乃公はどうとも罪を受けるから、お前さんはどうぞ、死なずにゐて貰ひたい」と、斯う云ふことになりました。さうして四月十一日に、村田新八、森山新藏と共に鹿兒島に護送されて、山川の港と云ふ所に行つたのである。さうして森山は行き所が定らないと云ふことで、山川の港で切腹してしまつた。南洲翁は徳ノ島、村田新八は鬼界ヶ島に流刑と云ふことになつた。

それから沖永良部島へ英國艦隊の鹿兒島襲撃

扱て徳ノ島に漸く著いた所が、そこで大に優待されてゐる。三郎公がそれを聞いて、トテツもないことだ、今少しく見せしめの爲め折檻せよとて、閏八月に船牢に入れて沖永良部島に送つた。著してから亦た牢だ。さうすると翌る年の文久三年七月には、生麥事件の結果、鹿兒島にイギリスの艦隊が来て、戦争が始まつた。南洲翁は、島にゐて坐視することが出来ない。船

追尋
鹿島

元治元年鹿兒島へ歸る

を造つて歸つて参加する積りで、その仕組最中に戦争が息んだと云ふことを聞いて、止まつた。斯くて元治元年、三十八歳の時、二月二十二日吉井幸輔（伯爵友實）西郷信吾——即ち元の従道侯、此の二人が迎へに來られて、村田を伴ひ、鬼界ヶ島を経て、二十八日に鹿兒島に着いた。是からが本當の南洲翁の第二期の活動が始まるのである。

第六 維新前第二期の活動

第二期の活動

第一期の活動は、順聖公の命を奉じて、京都と江戸との間に、徳川將軍の所謂世嗣問題に奔走し、第二期の活動は、元治元年から起つて戊辰の役まで續いたのである。

軍賦役となる

禁門の役

即ち南洲翁は鹿兒島に著くと間もなく、三月三日に上京を命ぜられ、十四日に京都に著き、十八日には軍賦役と云ふものになつた。いよいよ重役に成られたのである。さうして四月十八日には、久光公が後事を托して鹿兒島に歸られた。其時が御承知の通り、長州の勢がつつて来て、さうして所謂禁門の役と云ふ久坂義助、入江九市、來島又兵衛、其他の面々が押して來た。あの時の騒ぎが始つてゐる。

南洲の本領發揮

茲に又た西郷南洲の本領がある。其時に薩藩代表者南洲翁に向つて、慶喜公が、列藩同様、長州の兵の退却をお前等の方から諭すやうにと言はれた所が、南

公と私とを明にし名分上立脚す

長兵禁門に迫り薩兵始め動く

洲翁が言ふのには、薩藩は朝廷の命を受けて、此の禁門を守る爲に來てゐるのである。長州と會津と戦争するのは、是は私の戦である。長州には恨はある。現に長州が薩摩の船を馬關海峡で撃沈してゐる。それは外國船と思つたのであつたかも知れないけれども、撃沈してゐる。だから長州には恨はある。併ながら私の戦に加入は出來ない。あなた方がやりたければ、あなた方が御隨意におやりなさい。鹿兒島の兵は天子様の御門を守るだけの事であつて、他の事は出來ませぬと、キツパリ斷つた。實に偉い。之に就ては、私は別に後から申しますから、今此處で言つてしまへば、演説の種がなくなるから此處では申しませぬが、實に西郷南洲の此の舉動と云ふものは、偉いと思つてゐる。所が長州の連中が遮二無二やつて來て、いよいよ御門を侵すと云ふことになつた。そこで薩兵は、會津に加勢するでもない、慶喜公の命を奉ずるでもない。苟も長州の兵が鐵砲の口を禁門に向つて發射する以上は、是は朝敵であるから之を撃退するのは、薩兵の義務である。と、それで薩摩は起つたのである。南

薩賊會奸
の名は皮
相のみ

洲翁の力ばかりとは言はないが、其時に若し薩兵が動かなかつたならば、どつちが勝つたか分らない。兎に角鹿兒島と會津とが力を併せて戦つたものだから、長州は散々な目に會つたのである。其代りに薩賊會奸——其時の勤王家からは、薩摩は賊、會津は奸と言はれるやうになつたのである。併ながら是は、私が南洲に向つて辯護するではないが、南洲の其時の態度は公明正大、眞に道理明白であつて、如何に長州が何と云つても、禁門に向つて發砲して來た時に於ては、之を衛ると云ふとは、禁門を守る事を命せられた其の職責に於て當然の事である。

長州兵の
捕虜を優
遇す

其時には南洲翁も一世一代で、自ら馳せ廻りて、戦を督せられ、足に負傷をせられたのである。所が、私は南洲翁に感心するのは、其の戦において長州の捕虜をどうしたか。恨のある長州の捕虜であるからして、是は十分虐待せないまでも、少くともそれ相當に取扱ふべきものであるが、南洲翁は之を何れも優待したのである。さうして直ちに其先を考へた。即ち長州全體を一緒にして敵

長州を説
いて善處
せしむ

とする時に於ては、窮鼠却て猫を咬むと云ふやうなことはいけなから、先づ長州の中でも恭順派と、不恭順派と自からあるから、恭順派を味方に附けるが宜いであらうと云ふとで、高崎伊太郎（後に五六）と云ふ人を岩國に使して、吉川監物を説いて、長州征伐が幕府の方で起つた時に於て、南洲翁が其間に奔走して、とう／＼長州を恭順せしめたのである。恭順せしむる爲には、益田、國司、福原、是等三家老の首を切つたのである。又た首謀者を相堂處分したのである。さうして其首を持つて出て、誠に相濟まぬから、どうぞお赦しをして戴きたいと云ふことになつた。

幕薩間意
見の衝突

斯の如くにして時局を綱めようとしたのでありますが、幕府の方ではなか／＼さうはいかない。此の勢に乗じて、長州を思ふ存分やつつけて仕舞はうと云ふ論が起りまして、是に於て始めて南洲翁と幕府——大きく云へば、南洲翁一人ではない、薩摩の有力者、若くは薩摩其物と云つてもよい、薩摩と幕府との意見の衝突を來したのである。

第七 維新大業と南洲翁

是より維新となる

出兵拒絶

長州と握手

是から先の事は維新の話しになります。南洲翁に取りては、一世一代の大芝居でありますが、皆さんが大概御承知になつてゐるとである。もう申しませぬが、唯だ極く概略の事を申して見ますと――

慶應元年五月上旬鹿兒島に歸り、大久保と出兵拒絶の相談をする。再度目の長州征伐と云ふ時になつて、薩摩では、先方に軍を出すことは出来ない。長州が恭順をして謝つたものを、頭を殴ると云ふことは、此方では出来ませぬと、キツバリ断つて了つた。さうして何時の間にか長州と聯合して手を握つた。其の聯合の機縁と云ふものは、何から起つたかと云へば、禁門の變に長州の兵隊を捕虜にしたのを優待し、悉くそれを長州に歸し、又た恭順の爲めに彼は周旋したからであつた。加之、坂本龍馬、中岡慎太郎などと云ふ土佐の人々が、居中調停をした。兎に角薩長聯合の端緒を開いたのである。さうして段

密勅申受

維新事業
出来

明治十年迄の概略

段進んで行つて、十月十二日には兎も角密勅を戴きたいと申し出で、十四日には薩長に對し、討幕の密勅が降つたのである。

斯くして明治元年正月三日が即ち伏見鳥羽の役、それから後は南洲先生、海舟先生の江戸城受授談判など、いろいろの事があつて、遂に維新の事業は出で來つた。其間今のやうに汽車でもあれば宜いが――併し汽車でも時々顛覆するやうな恐れもあります。兎も角汽車でもあれば宜いが、其の時は随分往來が不便で、汽船があつても、中々さう今のやうな譯にはいかない。天津丸とか何とか云ふやうな、立派な船ぢやない。だから其の奔走には、随分骨を折られた。上野の彰義隊討伐は云ふ迄もなく、或は越後に或は函館に、そつちに奔り、こつちに走りして居られた。

さうして遂に明治二年に、正三位、賞典二千石を頂戴し、二つながら辭せられたけれども、聽かれなかつた。それからいろいろな事があつて、廢藩置縣。岩倉大使以下大久保、木戸、伊藤等の洋行。御巡幸などあつて。明治六年に征

韓論となり、さうして明治十年の九月廿四日、即ち今日、數へ年の五十一歳で死なれたのである。是が概略の傳記で、あとの肝腎な所は言はずに済んだのである。何故ならば、それをお話してゐれば、私のお話を今後にする時間がなくなる。是から私は、聊か南洲其の人に就て、少しお話をしてみたいと思ふのである。即ち薩州の勢力は大である。どうして其の大なる力を、何故に又た如何にして南洲翁が、自由自在に之を扱ふことが出来たかと云ふやうなことに就て、申上げて見たいと思ふのであります。

南洲翁大
の勢に就
ての研究

力をつつ
立徳を以て
人として

南洲翁は

私の考へるのに、一體世の中には二つの人がある。力と云ふものを主として立つ人と、徳と云ふものを主として立つ人と二つある。併ながら動もすれば、力ある人は、力餘りあつて徳足らず、徳のある人は、徳餘りあつて力足らず、どうしても徳と力と云ふものが並ばない。

所が西郷南洲翁は、一面から見れば力の人、實に渾身皆膽、あの人の大きな身

徳と力と
を具有す

大節あつ
て大事を
辨ずる者

鹿兒島は
勝力を以て

體全部は、あの人の膽であると言つてもよいやうな譯である。他方から見れば又徳の人である。春風人を薫ずると云ふ人だ。此の徳と力とこの二つが全く都合よく調節がとれて、和合してゐる。是が南洲翁の所謂天下に無比の位置を占めた所以であつて、單に力と云ふ點からすれば、南洲以上の人もある。單に徳と云ふ點からしても、或は南洲に及ぶ人もある。併ながら徳と力とを兼ね持つた所のものがあつて、従つて其の力が徳の光を増し、其の徳が力の光を増す。徳が即ち力、力が即ち徳と云ふやうに、徳と力が調和して、恰も二つのものが一つのもの、やうに働いて來たのである。此が所謂天下の大事を辨する者は、天下の大節ある者なりと、昔の人が言つた通り、西郷南洲翁が天下の大節ある人として、天下の大事を爲したのであらうと思ふのであります。

鹿兒島は、力と云ふことは昔からやかましく言ふ所、又た徳と云ふとも、随分日新公を始め語つてゐられる。併し何れかと云へば、力の方が勝つてゐる。山陽が書いたものにも、『風氣習俗、雖屠販、勇決過人。粹然爭鬪、動輒至殺人

強い種族

自殺○視レ死如レ戯、然而平時、趨レ利避レ害、不レ顧ニ親戚○故雖レ銳、而有レ時不レ恥ニ於退○『屠販と云ふのは、先づ下等社會と云ふものである。さう云ふ強い者であつて、死を視ること戯の如くである。所が平生は利に趨り害を避け親戚を顧みず、人の見ないやうな時には、勝手に逃げて仕舞ふ。』と斯う云ふことを山陽が言つてゐる。『夫以薩人之勇、而又教之レ以レ方、則其親レ上死レ長之俗、豈他邦所及哉。』斯う云ふ強い種族であるから、之を教育する時には、どの位良いものになるか分らないと云ふことを、山陽が言つてゐる。

南洲翁は空想に耽らす

即ち南洲は同じ芋であつても、餘程質の良い芋である。理想的の芋である。そこで南洲翁に於て一番特長は何かと云へば、未だ曾て空想に耽らない。空論を事としない。力の人である。如何なる場合でも實行力のないことはしない。併ながら力があるばかりぢやない。大義名分と云ふことは始終考へて居る。此の大義名分と云ふことに就て、南洲翁の主君であり、且つ先生である所の順聖公の勤王の大精神、又た藤田東湖、長岡監物、斯う云ふ先輩の感化が、自から南洲

大義名分は其本領

文久二年の時局と南洲翁

翁の素質と一致して來たものであらうと思ふのであります。此の大義名分と云ふことに就ては、如何なる場合でも南洲翁は考へてゐる。此れが南洲翁の本領である。此れが薩摩芋中の最善の芋たる所以である。即ち文久二年の時もさうである。たゞ力があつてもいかぬ、又た議論があつて力がなくていかぬ。文久二年の時は皆が言ふのに、三郎公を奉じて京都に行つて、春嶽公を總裁にする。又た慶喜公を將軍の後見職にする。斯う云ふ詔勅を以て幕府に臨むと、斯う言はれた。所が南洲翁が言はれるに、それは結構である。が併し、若し幕府がそれを聽かない時にはどうするか。すると中山仲左衛門に言ふには、聽かない時には京都に居据りしてゐる。南洲翁が言はるゝには、それはいかぬ。京都に居据わると言つても、錦小路の薩摩の屋敷には、居据するやうな場所もない。兵隊も何も置かれる所はない。若し又其の時に、幕府の者が外國と謀を通じて、兵庫灣を閉鎖して鹿兒島との連絡を絶つことになつたならば、吾々は袋の鼠ぢやないか。さう云ふことはいけな。兎に

寧ろ江戸に直行

角今度はお出でにならないが宜いだらう。代理を御出しになるか、若し強ひてお出でになりたいと云ふことであれば、京都に寄らずに、蒸汽船で江戸の方に真直ぐにお出なさい。さうすれば上方では騒がうが、此方には差支はあるまいと、斯う言はれた。

先の先まで見据るなをつける

侍る

勇氣と力と道理と

皆様は、西郷南洲翁と云ふ人は、生命さへ捨つれば宜い。一本調子で水火も辭せずと云ふやうな人だらうと、お考へになつてゐる御方が、萬一あつたか知れませぬが、さう云ふ御考へがあれば、それは間違である。なか／＼此人は、一の手ばかりでなく、二の手、三の手、先の先まで考へて、いよく此處と見据るがつかなければ、決して動く人ではない。事を創めればやり通すだけの力があつて、始めてやるのであつて、一か八か、一つ賭博をやつて見よう、などと云ふやうな山師根性と云ふものは、此人には爪の垢ほどもないのである。勇氣がある。けれども力と一體に依つての勇氣、道理と一體に依つての勇氣で、決して唯の匹夫の勇ではないのであります。

天下泰平未し

武力解決の決意

平和解決傾くにも耳を

先に申しました禁門の時にもさうである。長州の時にもさうである。東北征討の時でもさうである。戊辰の際、皆が申しますには、もう慶喜公が恭順したから、是で天下泰平だと云ふ。南洲翁はさうでない。此の勢ひに乗じて押附けるだけの力を以て、官軍が進んで徹底的に行かない以上はいけるものぢやない、と云ふことを言つてゐる。又た維新の當初一方に於ては、武力的解決と云ふことを既に定めて居らるゝに拘らず、土佐派の代表後藤象次郎など、云ふ人は、平和的の解決問題を持つて來て、南洲翁に説いたのである。さう云ふ場合に於て、南洲翁は其の議論を受け容れてゐる。それぢやおやりなさい。やるだけの途をやらして見ると云ふ考である。私實にそれは感心をしたのである。南洲翁は出來ぬとは知りながら——丁度死ぬる人には、是は死ぬると云ふことが定つてゐるけれども、皮下注射をしようと思ふのに、もう死ぬからしなくても宜い。薬は飲ませぬでも定つてゐると云ふやうなことは言はない。それぢややつて御覽なさい。私も反對はしないと、斯う云ふ態度で、ちやんと順序

を盡してゐられる。是は實に偉い。

『人事を盡して、天命を俟つ』とは、南洲先生の服膺せる金言であつた。

第八 南洲翁の本領 (上)

場合に
り理窟
言つた

正しき道
しを力
で行く

元來薩摩人は理窟を言はない。素より南洲翁も理窟は言はない。併ながら言ふべき時には、よく理窟を言つた。即ち西郷の所謂征韓論でも、皆の連中は、朝鮮の無禮を咎めて之を討つと言つたのに、南洲翁は、それでは名義がない。無禮は無禮だが、一つ私が出かけて行って、朝鮮人と談判をする。さつと其時に私を殺す。其時に皆さんが、正々堂々と罪を鳴して行かれば、即ち出兵の名義も立つから、私か血祭りになつて行かう。と斯う云ふ譯で、弱いから討つとか、討ちたいから討つとか、今が都合が好いからやりつけると云ふやうな事で、人が寝てゐる時に寝首を掻くやうなことをする人ぢやない。一つの不幸を殺して天下を得るもせずと云ふ言葉がありませうが、南洲翁が果して其通りであつたか、否かは知らないが、彼としては常に大義名分、條理分明、正々堂々、ちやんと正しき所の道を履んでゐる。正しき道を、力を以て押しつけて行き、

道理と力の
合體

勘定書を
出さぬ人

無欲、南
洲の大

徹底して行くと云ふのが、あの人の本領であると思ふ。それで南洲翁を以て、雷に力の福音者と云ふのも間違ひ、あの人を以て、雷に道理の説明者と云ふのも間違ひ。行ふだけの力を以て、行ふべき順序に依つて、所謂の道理と力、徳と力、總て此二つのものを一緒にして行くと云ふのが、あの人の本領であると思ふ。それがあの人の天下に志を得た、一の大なる理由と思ふのであります。

其の次は、あの人は仕事を仕放しで、決して勘定書を突きつけるやうな人ぢやない。世の中には仕事をせぬ前に、前金を取らうと云ふ者さへある。十の仕事をして百の勘定書を出す人もある。併ながら南洲翁は、仕事の仕放しで、誰に向つても勘定書を出さない。是がどうも南洲翁が天下に人心を得た一つの大なる理由である。又た吾々が何とも言へない有難く、殆ど此の人を愛するばかりぢやなく、拜みたいやうな氣持の出る所であらうと思ふのである。世の中にならう云ふ人は、なか／＼少ない。無欲などと云ふことは、タツタ二字で書けるの

成さしむ

であつて、電報を打つてもムヨクと唯だ假名で書けば何でもない。併ながら此の無欲と云ふことは本當にむづかしい。北條泰時が、明慧上人に、どうしたらば天下を治むることが出来るか、と云ふことを聞いた。上人が答へまするには、欲を去りなさい。無欲になりなさいと云ふことを言つたのであります。南洲翁は誰が教へたともなく無欲である。是が實に南洲翁をして大を成さしめた所の大なる理由であらうと思ふ。只だ此の一點が、維新の群雄に傑出してゐる所以である。

緻密精細
なる英雄

もう一つ皆さんの考と違つてゐないかと思ふことは、英雄と云ふものは、兎に角磊落、粗豪と云ふことで、借りた金も返さない。昨日言つたことと今日言つたことと違ふ。約束は違へる。所謂大行は細謹を顧みずで、兎に角さう云ふところが英雄の資格のやうになつてゐるやうに考へますが、我が南洲と云ふ人は、如何にも緻密な人である。實に精細な人で、誠に小さい所までも氣のつく人である。唯あの大きな身體をコセ／＼しない。氣がつくれどもが、ついたやう

な風をしない。唯だ心の中でついでるだけである。それで誰も気がつかない。當人だけが気がついて、気がついたと云ふことを他の人が気がつかないのであります。

美田も買
借金も残
さない

諸君は南洲翁に、『子孫の爲めに美田を買はず』と云ふ詩句があるのを、御存知でせう。子孫の爲めに美田を買はず。併ながらそれと同時に、子孫の爲めに借金を残さず。南洲翁は子孫を大金持にはしない代りに、亦た大借金も遺して迷惑をさせない。借りもせず、貸しもせず。喰ふだけのもので喰つて行けるやうになつてゐるのが、南洲翁の一家の經濟であつたと云ふことである。即ち支那の諸葛孔明と同様であります。是は私の想像ではない、松方公の話である。松方公の申されるには、世の中には不思議だ。非常に緻密であるやうな大久保さん、私經濟では、何等の貯蓄なく借金を餘して仕舞つた。非常に磊落とか、無頓著とか思はれてゐる西郷さんは、ちやんと家の決算勘定は立派にして、貸しも、借りもせないやうなことであつた。斯う言はれて居ります。

貸借なし

父の借金
を清還す

成る程さうであらうと思ひますことは、南洲翁が明治五年に國に歸られた時に、南洲翁のお父さんが、或人に借金されたのでありますから、餘程昔の借金でせう。其のお父さんが借金されたと云ふ二百兩の金を持つて、『此の金は、親父が拜借をして、是まであなたに御迷惑をかけてゐるが、利息を積れば幾らになつてゐるか、定めて澤山であらうと思ひますが、此の二百兩を利息と思ふて受取つて下さい。是で私も漸く安心が出来るから、どうか出来ることならば證文を返して下さい。』どうも二百兩を返された所も感心であるが、證文を返して呉れと言はれた所も、私は流石に緻密だと思ふ。證文などは、どうでも宜いと、言はれさうなものであると思ふが、後から問題でも起されては困ると、お考へになつたのでせう。如何に西郷さんでも、借金を二度も三度も拂ふと云ふことは迷惑であるに違ひない。證文は返して呉れと、言はれた所、實に綿密な人である。

證文取戻

謹慎

諸葛孔明が、曾て出師の表に『先帝臣が謹慎なるを知り、臣に託するに大事を

夫道人

几帳面

誰でもは
死は結論
は南洲翁に
前提

西郷南洲先生 五二

以てせり」と言つてゐるが、實に西郷南洲は、身體は大きい。總てのものが大
きい。さうして考へは細かくて、用心深く、安詳、縝密、謹慎、苟くもせな
い所の、人であつたと云ふことを、信じて疑はぬのであります。是が又た普通
の人の及ばない所で、手紙一つ御覽になつても、三間書いた手紙でも、三寸の
手紙でも、字一つ變つた所がない。殆ど消した字一つない。如何なる多忙な時
のものでも、ちやんと几帳面に書いてある所を見れば、如何に此の人の心か可
憐であつたかと云ふことを、私共は恐入る程感心するのであります。

それから一つ私が見る所を申し上げますと、誰でも死ぬると云ふことは、別
に不思議ではない。私共も皆さんも、一度は死ぬるのである。實際死ぬると
云ふことは、時間の問題であります。所が大概の人は、死ぬると云ふことは結
論である。段々勉強をして、年を老つて行けば死ぬる。働いて年を老れば死
ぬる。戦争に出れば死ぬる。斯うすれば死ぬる。あゝすれば死ぬる。死ぬると云
ふことは結論である。所が南洲翁は、死ぬると云ふことが前提である。總て何

夫道人

大事小事
を常に平
心に處置
した所

南洲其人
を描き出
した手紙

事も死ぬると云ふことから、割出して來てゐる。何時でも死ぬると云ふことの
考へが、一番先に立つて、それから總ての考へを割出して來てゐるやうに思ふ
のである。即ち南洲翁は前提が死である。吾々は結論が死である。先にお家騒
動の張本某女處分の時も死ぬると云ふ、順聖公の死ぬる時にも、月照和尚の
時にも——是は既に死なれたのである。徳ノ島に行かれた時にも、既に多分三
郎公から、切腹の命令が來るだらうと覺悟されてゐる。朝鮮の問題の時にも、
死ぬる積りであつた。十年の時には尙更の事である。南洲翁は常に捨身の勇、
所謂禪學では大死一番、死ぬると云ふことの捨身、死んだものと云ふ決心から、
總ての事をやつてゐられるものであるから、大きな事でも、小さな事でも、何
も彼も、當り前に之を處分して行くことが出來たのであらうと思ふ。

私は南洲翁の書かれた手紙を見て思ひました。朝鮮に自分は使節になつて行
きたいと云ふことを書かれた。それにはトテモ副島君程の議論は出來ませぬが、
死ぬることだけは出來る、と書いてある。自分は副島さん程の學問もなければ

見識もないから、トテモ先方に行つて、先方の人をやりこめる程の、議論は出来ぬかも知れぬが、私も死ぬることだけは出来るから、どうか私をやつて下さいと、斯う云ふ手紙である。實に此れは南洲其の人を描き出したものである。死ぬを恐れない。死んで見せるなどと、生命を惜しむ人は能く申します。併ながら惜む、惜まぬは問題ぢやない。生命はないと云ふことの前提から、歩き出してゐる人であるから、何時も捨て、かかつてゐる人であるから、惜む、惜まないもない。もうないと云ふことが、始まりである。無から踏出して來てゐる。此の人の生涯を一貫してゐるのであります。是が南洲翁の一つの特色と考へます。

一の特色

江戸へ落出しの時
の手紙

其の死ぬることに就ては、二十八歳の時の手紙に、斯う云ふことがある。安政元年八月二日であります。

熟慮仕候處、いづれなり姦女を斃し候外無望時と伺居申候。御存知の通り身命なき下拙に御座候へば、死することは塵埃の如く、明

終始一貫

情の人

剛志熱腸
併せ有す
眞の英雄

日を頼まぬ儀に御座候間、いづれなり死の妙所を得て天に飛揚致し御國家の災難を除き申度と、堪兼候處より相考居候儀に御座候。斯う書いてある。死ぬることは塵芥の如く、明日を頼まぬ儀に御座候間、死の妙所を得て天に飛揚致す。魂か天に飛揚して、御國を護らう。斯う云ふことを言つてゐる。是が江戸に初めて踏出しての江戸からの手紙である。此の決心でズツと貫いて行つたのであらうと、思ふのであります。それからもう一つ考へますに、其の特色の一つは、實に情の人で、英雄にも無情の英雄と、多情の英雄とある。情がなから英雄にはなれないと云ふのぢやない。世の中には随分情種乏しくして英雄たる人もある。併ながら情が無くして英雄である人は、どうも味が少ない。人間味が少ない。どうしても人が好かない。人望がない。併ながら世の中には、情があつて又英雄でない者もある。されど富士山が崩れても動かぬ剛志と、石をも銘かす熱腸とを併せ持つ人が、始めて眞成の英雄である。即ち南洲が其人である。其の點から云へば、大久保

甲東の如きも、決して無情とは云へない。相當に情のある人である。併ながら、
どうしても此れは南洲に及ばぬ。徳川家康、豊臣秀吉、此の二人を比べて見れば、
二人とも偉い。而して亂暴なことから云へば、秀吉の方が寧ろ亂暴である。併し
併しどうして秀吉が今日まで人望があるかと云へば、秀吉は慘酷なことはした。併
併ながら又此の人は、人間味の多い人でありました。其の點が人に好かれる所
以である。

秀吉に比
べて純潔

家兄の事
を報じた
従道侯
の手紙

我が南洲翁は秀吉に比ぶれば、其の情が寧ろまだ純潔で、秀吉の情は、動もす
れば役者の情であつた。秀吉の涙は、動もすれば團十郎菊五郎の涙のやうな場合
もあつた。大概の者は、だまされると知りつゝ、泣いたのである。それ程秀吉は大
なる役者である。併ながら南洲翁は役者ぢやない。正直正銘の眞物である。
南洲翁は實に多情な人である。私は多情の證據として一二を申しませう。南
洲翁の弟の西郷従道侯の手紙がある。此れは従道侯が明治の初年に洋行して
歸られ、鹿兒島に歸つて、南洲翁に、あなたも速かに東京にお出でになつて、

廟堂に立つて戴きたいと云ふことを話された。それに就ての手紙である。
最早愚兄へも相見、篤と朝廷の情實詳に申述候處、落涙に相及

候次第に御座候。

落涙二字

従道侯は、文章家ぢやない。文章を飾つて書く人ぢやない。若し此の手紙を、
演説者が書いたと云ふことになれば、落涙の二字は、或は挿み入れたかも知れな
いと、あなた方が御邪推になつても止むを得ない。併ながら不文と申しては恐
縮であるが、兄さんの南洲翁に比ぶれば、先づ不文と申しても宜い、餘り文章
を書くお方ぢやない。従道侯の書かれた手紙に、『落涙に相及候次第に御座
候』とありまするから、此れは本當に南洲翁が、従道侯の話を聞いて、さう
云ふことであつたかと、涙を流されたのが分つてゐる。此の機會に申上ます
が、従道侯の外國にあります際、南洲翁の贈られた詩に、

兄弟東西千里違。 今宵齋戒客星祈。
欲離姑息却姑息。 不欲多能願早歸。

南洲翁が
弟信吾を
憶ふの詩

第八 南洲翁の本領 (上)

憶弟信吾在佛國

と申すのがあります。何んと至情が言外に溢れてゐるではありません乎。

又南洲翁の其の弟吉次郎氏の討死に就ての手紙を申しませう。

弟吉次郎
の戦死に
付て手紙

愚弟吉次郎には、越後表に於て、戦死いたし残念此事に御座候。拙者第一先に戦死可致處小弟を先立せ、涕泣いたすのみに御座候。御悲察可給候。

自分が先に死ぬる所に、弟を先立て、實に泣くばかりである。どうぞあなたも御悲察給りたいと云ふことを、書いてゐられる。御當人が泣いたと云ふことを書いて居られるから、誰も之に向つて何等言葉を容れやうがない。

朝鮮へ使
節決定の
時の詩

それからいよいよ征韓の議論が定つて、南洲翁が使節となつて行かれると云ふ廟議が定つた時に、家に残された所の詩がある。此の詩は唯今青山會館に陳列してあります。昨日私も拜見致しました。實に感激に堪へぬのでありますから、此處に寫して参りました。

酷吏去來秋風清。 鷄林城畔逐涼行。

須比蘇武歲寒操。 應擬眞卿身後名。

欲告不言遺子訓。

正成が正行に言つた櫻井の驛のやうに、話したいと思ふが、どうも此の際、國家のことで、明ら様に言ふ譯にはいかない。

難離難忘舊朋盟。 胡天紅葉凋零日。

遙拜 雲房霜劍橫。 (以上合せて律詩一首)

紅葉が散る今日において、自分も使命を奉じてゐるが、『遙拜 雲房』——是は流石に西郷南洲は大義名分の明かな人で、雲房と云ふとは即ち宮闕の事でありますから、青山會館に行つて御覽になると分りますが、ちやんと赤字がしてある。天子様の所を明ら様に書いては畏多いから、ちやんと敬意を表して字を缺いてある。——實に是は、詩が良いとか、悪いとか言ふことでなくして、眞に一字一涙で、友達に別れ、子に別れ、自分が最後の生命を朝鮮に捨てると言ふ、其の潔き決心は、實に何とも言へない。死を見る戯れの如しぢやない。

死は實に泰山より重いけれども、其の重い死を鴻毛よりも軽く見てゐられるのであつて、譯が分らずして、飛んで火に入る夏の蟲ぢやない。實に十分の愛著、十分の考を持つて居られたのである。此れは實に偉い心である。

第九 南洲翁の本領 (下)

力頼む
事情に
引かされ
る事弱
點其の弱

併し私が考へまするに、斯う申せば美しい事ばかりであるですけれども、此の力と云ふことと、情と云ふこととが、矢張り先生の弱點だと思ふ。私は決して攻撃するのぢやない。けれども弱點は弱點として申上げて置いた方が宜いと思はれます。どつちかと云へば、力を頼むと云ふことと、情に引かされると云ふことと、此二つのものが、即ち先生の晩年——十年の役の問題を解決するものであらうと思ふのである。是が先生の長所でもあれば、又た弱點でもある。先生にどう云ふ弱點があるかと云へば、先生は若い者を可愛がつて、——壯士を愛し過ぎた結果があつて、それで何となく其の壯士の人望を得ることを努めると云ふのぢやない。併し人望を得ることが好きか嫌ひかと云へば、非常に好きである。其の點に弱點があつた。今日の言葉で云へば、南洲先生の選舉區が即ち薩南の健兒である。南洲先生の選舉區の薩南の健兒は可愛くて堪らない。

彼等から先生が好かれて居らるゝ爲めに、先生も亦た彼等を好かれてゐる。此の如くして健兒の力を頼み、健兒の情に引され、遂には情死の一段となつて来た。恃むと引るゝと云ふは、實に恐ろしいことであります。

私は此の點に於ては、寧ろ大久保甲東の方が、弱點が少なかつたと思ふ。クロンウエルの如きさへも、情に引かされたのである。私が決して西郷南洲とクロンウエルと、一つに論ずるぢやないけれども、英雄と云ふ點は一緒である。情に厚い、力を信ずる英雄と云ふ點、又は理想を持つてゐる點に於ては一緒である。其の他は違ふ。其のクロンウエルさへも、鐵騎に動かされて居つたのである。其の中の頭目たるアイルトンと云ふのは、クロンウエルの婿であつたと思ひます。桐野や篠原などと云ふのは、南洲の婿ではないけれども、アイルトンのやうな立場にゐられた人であらうと思ふ。斯う云ふ所が、聊か先生の弱點であつた。即ち長所が缺點の方に流れて行つたのではないかと思ふのであります。

南洲と甲東とクロンウエル

長所缺點を藏す

段々話も長くなりました。皆さん御退屈でありませうが、もう少時御忍びを願ひたいと思ふのであります。

南洲翁は今申上げた通り、鹿兒島の健兒を頼みとし、鹿兒島の勢力と云ふものは、餘程重大に考へて居られた。所が若し日本の世界的政策と云ふことに、眼を注いだ人があるならば、昔の理窟を言つた所の、例へば本多利明とか、林子平とか云ふ人は別として、實際的政治家としては、南洲翁の如きは、實に其中の、錚々たる方と存するのであります。南洲翁が、沖永良部島に居られた時に、鬼界ヶ島に居られる所の村田新八君に、宛てられた手紙に、斯う云ふとがある。

幕威日々相衰候模様と被伺申候間、決而覇業を起す邪心之諸侯も出来候半歟。いづれ夷人と相結彊國は、彼を以内を痛め、錚を挫候而衰を待候はゞ、事を被計候て如何計之國衰にも候はん。可畏世上に相成候。

維新以前此の世界的眼孔を有せ

斯う云ふ風に、幕府の勢ひが衰へて来たから、此の際外國と結んで、外國の力を以て日本の國を痛めて、さうして覇業をやらうと云ふやうな、悪心を起す者も段々出来て来るだらう、さう云ふことになつては、國家は實に恐るべきことであると言ふことを、言つてゐられる。是は現に、幕府の中に於ても、フランスから金と軍艦とを借つて、薩長を叩き潰すと云ふ考へを持つた人もある。或は極端に言へば、薩摩でも、長州でも、幕府からさう云ふ目に遭ふと、黙つてゐられず、此方でも英吉利と結んでやらうと云ふ氣にならぬとも限らぬと、其の事を考へてゐられたのである。

南洲翁は
外交に明
るかつた

諸君或は意外の感をなさるゝであらうが、南洲翁は、實に外交と云ふことに、餘程あかるい。あなた方は、南洲翁が西洋料理の食ひ方も知らない。或はソツプを皿ぐるみ飲んだり、肉を手掴みに喰べられたりするやうな英雄豪傑であるかのやうに、御考へになつたか知れませぬが、南洲翁は案外文明人である。容貌は、上野にあの通り、つんつるてんの銅像を出して置くので、何時もあゝ云ふ

風采の立
派と上野
の銅像

風で、腕まくりをして居られるやうに思ふ。私も實はさう云ふ風だらうと思つて、勝海舟先生に聞いて見ると、なか／＼さうではなく、其の容貌、態度は實に立派なもので、押出しもよく、著物などもちやんと著て居られた。まるで大藩の御家老と云ふやうな、感じである。實に立派な態度を持つて居られたと云ふことである。上野の銅像は、アレは遊びに行かれる時のもので、アレを標準にお出しになつたと云ふのは、而も天下の公園にアレを御出しになつたのは、少し考へ違ひではなかつたかと思ふ。

英國公使
等とも懇
早く懇意

それでパークス君とも非常に妥協した。而して特にサー・アーネスト・サトウとも非常に懇意にして居られました。サトウの書かれたものには、さう詳しく書いてないけれども、密談もしてゐるのである。さうして南洲翁が江戸(東京)に上られる時には、ちやんと横濱で、一人を介してパークスと渡りをつけて、諒解を得てゐられる。書かれた手紙にも、『斯くする時に於ては萬國公法……』斯くする時に於ては、決して日本で戦することを、日本内地の戦として、世界

江戸を焼
かない腹
居た極つて

は知らなくても宜いと云ふやうな考でない。世界が見ても差支ないだけに、ちやんと筋道を立て、居られるのである。それで江戸を焼かないと云ふことは、勝が言つたから焼かないのぢやない。西郷南洲は、初から焼かない積りであつたに相違はない。パークスとの間に、自ら話も或程度まではやつて來てゐる。尤も、こちらが抵抗すれば仕方がないけれども、せなければ焼かぬだけの決心をしてゐられたに相違ない。勝の方でもパークスにいろ／＼交渉をしてゐた。パークスは勝の方からも、南洲の方からも、兩方から話を聞いてゐる。兩方の話はパークスが一番よく知つてゐる筈である。さう云ふ譯でなか／＼如才はないのである。決して外國と云ふことを、忘れてゐたのではない。即ち朝鮮に向つて行くと云ふことも、所謂大陸政策に向つて、踏出すと云ふことであつた。即ち南洲翁の志と云ふものが、明治二十七八年の役、三十七八年の役となつてゐるのである。彼の志は、決して朝鮮をどうするなどと云ふことではない。朝鮮ではない。對手はロシアである。其の事はちやんと書いて

大陸政策
に踏出す
第一歩

日本帝國
主義の開

警察制度
に貢獻

聖徳養成
に最も力
を捧ぐ

あるのであります。今日日本ではイムペリアルリズム、即ち帝國主義と云ふことは、非常に流行らない。帝國主義など、云ふことを言ふと、もう古い人間にして仕舞ふ。併ながら日本のやうな島國であれば、人口のはげ場を拵へなくてはならない。此の點から考へても、イムペリアルリズムは止むを得ないのである。唯どう云ふ方法でイムペリアルリズムを行ふかと云ふことは、時と、所と、場合とに依つて違ふのである。けれども其の精神は、即ちイムペリアルリズムになくてはいけぬのである。此の點に於ては、西郷南洲翁が吾々に向つて先例を示したのであつて、日本の帝國主義は、西郷南洲に依つて開かれたと云うても、誣言ではあるまいと信ずるのであります。

それから皆さんが意外にお考へになることは、警察制度である。警察制度などと云ふことは、誰が考へたか、誰が始めたかと云へば、矢張り南洲翁がやつたのである。

それよりもまだ大切なことは、『聖徳養成』と云ふこと 明治天皇の聖徳を養成

明治天皇の御資質

し奉ると云ふことである。此れは實に南洲翁一人ではない。此の事に就ては、岩倉公も三條公も、殊に大久保公も力を注がれたのであるが、最も之を痛快に行はれたのは、即ち西郷南洲翁である。南洲翁は、自分の兄弟も嘗ならざる所の吉井友實伯を、宮内省に入れて、宮内省改革の衝に當らしめ、それから村田新八を宮内省に入れて、此れを擁護せしめた。將來は此の人が宮内省を預かる積りであつた。又た侍従には高島鞆之助、米田虎雄、山岡鐵太郎と云ふやうな人を入れて、宮内省の大掃除をした。其の時の手紙は、實に何とも言へないものがある。明治四年十二月十一日、椎原與三次翁に宛てたもので 明治天皇の御事を斯う書いてある。

一體英邁之御資にして至極御壯健、近來は箇様の御壯健の主上は不被爲レ在公卿方被ニ申居一候。變革中々一大好事は此に御身邊の御事に御座候。全く尊大之風習は更に散じ、君臣水魚の交りに立至り可レ申と 奉レ存候。實に 明治天皇の聖徳をして、御歴代中の明天子たらしめたる所の基を成した

南洲翁は難物

と云ふことに就ては、我が南洲翁の力は、實に大なるものがある。此の事を明治天皇が思召になつて、十年の亂後になつて、更に南洲翁の家に爵位をお與へになつたこと、僭越ながら推察致しまするのであります。

齊彬公と久光公と南洲翁

併しながら南洲翁も、實はなか／＼の難物である。中々容易に行かない。それで順聖公も言はれた。此の男は獨立の心が多いから、乃公ならば使ひこなすが、他の者ではむづかしい。斯う言はれたと云ふことであります。が、どうも其通りである。一番困難であつたことは、順聖公の弟御の久光公、此の久光公と南洲翁とが、シツクリそりが合はない。有體に申せば、南洲翁が久光公をよく諒解して居られない。もう一つ言へば、實は餘り安つぽく買つて居られたのではないかと思ふのである。お兄さんの順聖公に比ぶれば、久光公は矢張り弟に相違はない。唯弟ばかりでなく、不肖とは云へないが、どうも兄程の弟とも思へない。併ながら、普通の大名からすれば、實に相當に偉い人である。矢張り此れも一個の人傑である。然るに南洲翁は矢張りシゴロ扱ひ――

清濁併呑
的の
あらず

「表面は知らないが、心ではジゴロ扱ひにして居られたのではないかと思ふ。それで久光公も、失敬な奴だ。不埒な奴だ。家臣であつて不届な奴だと云ふとが、顔や口には出なかつたが、心の中に思つて居られたのではないかと思ふ。是がどうもシツクリ合はない。

南洲翁は情の人であり、徳の人であるが、度量はあなた方の思ふ程大きな度量ぢやない。さう清濁併呑せむ人ぢやない。清は呑むけれども、濁は嫌ひ、人の悪いことは非常に嫌ひ、——誰でも人の悪い事を好く人はない。それを好く人は悪黨である。南洲翁は非常に悪いことが嫌ひで、南洲翁があいつはいかぬと睨めると、もう如何に謝罪しても、釋明しても、ちよつと解けようとは思へない。さう云ふ譯であるから、餘程むづかしい。所が其のむづかしい人間をうまく舵を取つて働かせて行つたのは誰か。是は大久保甲東の力で、大久保甲東が陰になり日向になり、久光公と南洲翁との間を、人知れない苦心をして、兎や角とつくらうて、維新の大業を成さしめたのである。

大久保が
南洲の
舵をとる

南洲は英
雄大久保
は經世家

凡そ世の中に偉いと云ふ人があれば、大久保甲東程偉い人は少ない。曾て私が松方公に申したことがある。西郷南洲は所謂英雄である。大久保甲東は所謂經世家であると、斯う申した。すると税所篤子爵が之を傳へ聞いて、「徳富君がそれだけ分つて居れば、もうそれで澤山だ。」と斯う言はれたさうです。私には其の話を松方公から伺うて、折紙をつけられたやうな氣持がして、如何にも有難く思つてゐる。今日も私はさう思ふ。併し大久保甲東の事は、兎が笑ふかも知れませぬが、來年は甲東の五十年祭でありますから、若し私が生きて居りましたならば、是非甲東公についても一言したいと思ふのであります。今日は控へて置きます。兎に角此の厄介な大物を、どうなり斯うなり舵を取つて、生きた働をさせられたと云ふことに就ては、實に大久保甲東の力と言はなければならぬのであります。

高踏勇退
の潔癖

南洲翁には一つ非常な癖がある。一體人には良い癖と悪い癖とあるもので、西郷翁のそれは何かと云へば、名利に淡泊であると同時に、高踏勇退と云ふ氣分

が頗る濃厚である。丁度支那で云へば、張子房とか、魯仲連とか云ふやうな風で、自分が仕事をして仕舞へば、勘定書も何もせず、ズツと行つて仕舞ふ。喰ひ逃げぢやないです。同じ行くにも喰逃げと云ふ奴は、人に厄介をかけて逃げる奴で、西郷翁の方は仕事をして置いて、挨拶も何もせず、お茶の一杯も飲まず、禮の一つも言はれずに、賃銀も取らずに、黙つて行つて仕舞ふ。賃銀を拂はうと云つても扱何處にゐるか分らない。書留で送る譯にも行かないと云ふやうな譯である。始終行き場が分らない、高踏勇退である。それだから、南洲翁を引張り出すのに、骨が折れて仕方がない。他の人は出しやばつて、——此處へ出て貰つては困る。此處は君が出る場所ぢやない。イヤ今度だけだからやらしてくれ、是はもう一生一代だから出してくれなど、云ふ人があるけれど、西郷南洲翁のはその逆で、始終、高踏勇退が殆んど病氣である。此れを引張り出して、兎も角もそこへ据ゑて、さうして舞臺へ立たせようとするには、なかく骨が折れた。此れには萬牛を廻らす金剛力が入用だ。

澤庵和尚
と南洲翁

南洲亦た
大久保を
尊敬す

世の中には、さう云ふ人が随分ある。現に澤庵和尚の如きがそれであつた。三代將軍家光が、折角東海寺と云ふ寺を建て、やつたが、何時も澤庵和尚はアレを逃出さうとして仕様がなない。それで澤庵番と云つて、旗本の侍を、澤庵の逃出さないやうに、東海寺の傍に番をさせて居つた。南洲翁も直きにブラリと逃げて仕舞ふ。それであるから、彼を引き留めて置くと云ふことが骨が折れた。それが即ち大久保公の力である。

實に其の大久保公の骨折と云ふものは、何とも云へない。其の代り、西郷翁の方からも、大久保公を尊敬して居つたことも、一通りぢやない。南洲翁が心から偉いと思つて服して居られたのは、恐らくは大久保甲東であります。其の甲東にやられた手紙の一節を讀んで見ますが、どの位尊敬して居られたかと云ふことが分る。

就ては閣老へ建白書御持參にて御討論の段、乍毎貴兄の御持前とは乍申雄々敷御論、實に御兩殿様御満足、餘程大久保が出来たと御意被遊、我々

共に到り難有雀躍此事に御座候。御建白の書面と云ひ、御議論と云ひ、相對して優劣無之、誠に天下の耳目を御定有之候儀、御國家の美事、後世青史に昭著たり。幾度も感誦、此因循國も正論國と相變じ候心地にて、鹿兒島が廣き様覺申候。御察可被下候。

斯う書いてある。『御持前とは……』此れは大久保さんに言ふ西郷翁の癖なんです。御持前とは、大久保公の強い意志、其の突込んで行かれる所の勇氣と云ふものに、實に西郷さんが感心して書いて居られる。實に偉いものを大久保公は持つてゐる。此の二人が一緒になつてゐたからして、それで御一新が出来たのである。薩摩の力を率ゐる所の徳のある西郷南洲翁と、天下に向つて責任の位置に立つてゐる大久保甲東公と、手を携へて行つたから、始めて出来たのである。如何なる場合でも、西郷さんの相手は大久保、大久保さんの相手は西郷と、あとは何人あつても此れである。

二人の協
力維新事
業成る

二人の合
離と波動

同死同生
の友征韓
論にて始
めて決裂

第十 征韓論と十年役

西郷南洲が生きてゐる間は、大久保甲東の相手は、決して木戸孝允ではない。西郷である。西郷の相手は決して大村益次郎ではない。何處までも大久保甲東である。此の二人が丈夫である間は天下泰平である。此れが意見が違へば、致方がない。其の時に於ては、相互ひに一騎討で、曩に大久保公が兵庫で言はれたやうに、もう此際は二人刺し違へて死ぬより外は、致方がないのである。私は此の征韓論のと然るに征韓論に至つて、初めて意見が違つたのである。私に此の征韓論のとを考へて見ると、實に何とも云へない。今尚此の事に就ては何とも言へない。西郷さんが死に行くとき云ふのである。愆もある筈はない。得もある筈はない。私が血祭りになると云ふのである。此れに愆得のある筈はない。それに反對した大久保さんや、岩倉さん、木戸さん、皆な國家の爲めと思ふより外はない。何も西郷さんと権力を争はうとか、さう云ふケチな考へは、大久保さ

んには爪の垢程もない。此れだけは兩方ない。反對するのも、國家の爲めに反對したのである。主張したのも、國家の爲めに主張したのである。安政の頃から、明治の初めまで彼は二十年、同生同死の積りで、互に相許して天下の事を成して来たものが、不幸にして意見が違ふと云ふのは、何たる不幸であるか、眞に不幸である。

妥協の餘地なし

此の二人は、意見が違つても妥協の途はありさうなものと思ふけれども、二人とも違へば妥協の途がない。そこに至ると二人とも難物である。西郷も大久保の言ふことを聞く譯には行かず、大久保も西郷の言ふことを聞く譯にはいかず、どつちかどうかなるより外に仕方がないのである。あの時の事を考へて見れば、大久保公の歸つたのは明治六年の五月である。たしか二十三日頃と覺えて居る。征韓論のいよく破裂したのは十月である。五月六月七月八月九月十月と、殆ど半ケ年の間、如何様にか二人の議論が纏まりのつくべき筈であつたが、もう西郷の方はちやんと定つて、譲る途はない。大久保の方も反對意見が

岩倉公さへ譲らんとし甲東に不屈

定つて、譲る餘地がなかつたのであらうと思ふ。されば流石の大久保公も、匙を投げて病氣保養として、箱根あたりへ行つて了はれた。

抑も明治四年には大久保、木戸、岩倉と西洋に一緒に行かれたが、歸る時には別々で、大久保公は明治六年の五月、木戸公は七月、岩倉公は九月に歸つた。まさか西郷南洲等は、此等の厄介者共の留守を奇貨として、閣議を定めたと云ふ譯ではなかつたでせうが、——面倒な者がゐるが宜いか悪いかと云へば、居らぬ方が宜いからやつたかも知れない——兎に角閣議ではちやんと定まつた。さうしてもう内勅を受けた位である。所が大久保公が何處までも頑張つて、ト、のつまりは、あの強情な岩倉さんが、西郷がさう云ふならば致し方はないから、西郷の意に任せようと言つた。岩倉さんさへ譲れば、大久保公は譲つてもよかつたかも知れない。併しながらそれを譲らないのが、大久保の本領である。天地が引つくり返らうと、自分が斯うだと思つたことは動かない。それが大久保の大久保たる所である。

甲東一片
の辭表廟
議を覆す

そこで十月十五日に閣議が定つて、いよいよやると云ふことになつた。岩倉さん
も致方がないと云ふことになつた。其の時大久保さんが三條公に手紙をやつて、
閣議でさうお定りになつたら致方はない。併しながら私は辭職を致します。
意思を變ずることは出来ませぬから辭職を致します。併しいよいよ朝鮮と戦
が開けた時には、不肖私は、國家のため兵卒の一人となつて従軍致しますか
ら、其の時には御採用を願ひます。と云ふ實に潔き手紙である。此の手紙を
以て三條公につきつけたのである。つまり此の手紙が三條公をして氣絶せしめ
た。まさか大久保さんが三條公を卒倒せしむるやうな手紙を書かれたのぢやな
いが、大久保さんの日記を讀んで見れば、『三條公が何となく御狼狼の體』と云
ふことが書いてある。此の手紙の爲めに、廟議が又ひつくり返つたので、辭職
と云ふことを聞いて、三條公が狼狽されたと云ふことが分る。

南洲甲東
性格の相
異點

此處が違ふ所である。西郷さんならば、あの時にはもう自分がやめると云つて、
何處にか飛出してしまつたと思ふ。大久保さんは其の手紙を突きつけてゐて、

なかく飛出さない、とう／＼引くり返してしまつた。岩倉さんが三條公に代
つて、岩倉さんの意見を陛下に上奏してそれが行はれた。西郷さん一派の意
見が行はれないと云ふことになつて、スツカリ引つくり返つた。流石の西郷さ
んも、此の時に至つて大久保さんのやり方を、餘程遺憾に思はれた。露骨に云
へば、大久保さんからまるで熱鐵を飲まされたやうな氣持をしたのぢやないか
と思ふ。立つてもゐられない。ゐてもゐられない。是は私が小人の心で西郷
さんの心を測るのだから、測りそこなつたか知れませぬけれども、此の時は非
常に考へられたと思ふ。

十年事件
の起因

是が即ち十年事件の因であると思ふ。いろ／＼理窟はあり、いろ／＼道行はあ
る。併しながら争は争であるが、實は南洲翁と大久保公と、全くあすこ
相撲をとつて、南洲翁は敗けたのである。敗けると云ふことは、勝負で致方かな
いが、相撲のとり方に就て、南洲翁は聊か遺憾を感じたであらうと思ふ。併し
甲東と云ふ人は、西郷翁と違つて、經世家であり、政治家である。政治を目的

政策上意
見の相異
南洲翁に
無限の同
情

としてやられてゐた。此れは決して權謀術數とは思はないが、西郷の方から見れば、此れは手ひどくやつたと思はれたであらうと思ふ。併し此れは大久保公一人ぢやない。いよ／＼形勢が斯うと見て、一番先に駆付けたのが大隈侯と、伊藤公であつた。又南洲翁の最も可愛がつて居られた所の黒田さん、或は弟の従道侯などと云ふ人も、止めるとは出来なかつた。大久保甲東を始め反對派の面々は、決して南洲翁に對して私の感情はなかつた。只だ政策上意見の相違である。彼も我も、均しく國家の爲である。然も南洲翁は、廟議も確定し、内勅も下り、自分ももう命を捨て、いよ／＼別れの詩まで作り、自分ももう嘸縁江畔、所謂『鷄林城畔逐涼行』で、自分は既に朝廷にお別れをして、心は早くも朝鮮に行つてゐる。その南洲翁に於ては、此れが根柢から覆へされたと云ふことは、實に残念であつたに相違はないと思ふ。是等の事を思つて見れば、十年の亂と云ふものも、何となく意味が解けやしないかと思ふ。私は決して此處で、何れが好いとか悪いとか云ふことを申すの

眞意劇

ぢやない。併しながら實に同情に堪へない。西郷さんに何ともおくやみの申し様がない。實にお氣の毒な次第である。怒る譯に行かない、泣く譯にも行かない、何とも實にお氣の毒の次第である。世の中に悲劇と云ふことがあるが、斯う云ふことが「トラゲディー」と云ふことであると思ふ。互に相許して兄弟も管ならず、死生を誓つた親友が、いよ／＼最期の際と云ふ時に、互に敵味方に分れて、反對の側に立つたと云ふことは、即ち實に不幸である。而もそれが私の爲めでなく、國家の爲と云ふ點から分れたと云ふことは、尙更不幸であると、私は思ふのであります。

第十一 ユーモアと正直

南洲翁とユーモア

眞面目なる手紙中ユーモアを藏す

さう云ふことは兎も角として、私 はもう一應申して置きます。先に私 は、南洲翁と云ふ人は、實に謙遜な人であると云ふことを申しましたが、併ながら私 が實に他の人に比べて感心する所は、西郷翁には「ユーモア」と云ふものがある。此れは實に珍らしい。日本人には兎角ユーモアがない。オドける時にはまるでオドけて、ユーモアの範圍位、打破つて仕舞ふ。所が南洲翁には、實に一種の「ユーモア」がある。人間が何となく餘裕があり、寛きがある。手紙などを見ると、眞面目な事を書いてゐる中に、思はずをかしたさに吹き出さねばならぬやうなどがある。それが何となく、一人で笑はなくちやならぬやうなことが、往々書いてある。例へば御一新の時に、大勝利の事を國元の、桂久武に書いてやられた手紙の先に、斯う云ふことがある。江戸の御屋敷を焼崩され、大阪の御藏屋敷焼失。此兩件實に残念の仕合、

ユーモアは西郷一家の傳統

是丈が負に相成候事に御座候。實に面白い。伏見、鳥羽から大阪まで、徳川勢を追拂つた勢を書いてやつて、非常に愉快な文章の上に、尚江戸の屋敷と、大阪の藏屋敷が焼かれて、是だけか負になつたと云ふことを書いてある。實に面白い。斯う云ふ名文は、文章を以て立つてゐる所の演説者と雖も、どう考へても斯う云ふ好い文章は書けない。「是丈が負に相成候」などと、何處を押せば斯う云ふ名文が出て來るのか、實に面白い。

此のユーモアは西郷家御家傳であつたか、從道公にも、大山公爵にもある。是等の御方と私も屢々御目にかゝりましたが、話を聞いてゐる中に、時として、段々眞面目な話を聞いてゐる中に、油断すると、途方トテツもない、ヒヤカしたり、皮肉を言はれたり、怒る事も、笑ふ事も出來ぬやうな場合に、屢々際會したことがあります。多分此れは、南洲翁のお裾分けであつたと思ひます。南洲翁の詩にあります。

規誨 自然生戲謔。 杯樽隨意極歡娛。

此の通りである。笑談を言つて、それが眞面目に出て来て、さうして自から人をして、此れはいけなかつたと、思ひ知らするやうな、それも餘り血の廻りの悪い男は、思ひ知らずにしまふ。さう云ふユーモアがあつた。斯う云ふ所が、英雄の骨でもない、肉でもないが、何となく英雄たる所であると思ひます。

根本性格
は正直

私は決して南洲翁を神様とも思はぬ。矢張り人間である。人間の中にも矢張り下司もあり、いろ／＼あると思ふ。けれども人をだます人ではないが、又だまされる人でもない。根は正直な人である。陰謀とか、悪計とか云ふやうなことは、嫌ひである。出来ることならば正々堂々でやる。止むを得ざれば策略もやるが、それも正直から出てゐる。それは大山公に與へられた詩の中に、『決勝奇謀發至誠』と言はれてゐる。私は實に是は名言だと思ふ。智慧とか、細工とか云ふものは、誠の心で、是非此の事を突き通したいと云ふ、誠心誠意があれば、自から道が開かれて来る。此の『決勝奇謀發至誠』と云ふ言葉は、

南洲翁の
名句

私の讀んだ書物の中には未だ載つて居らぬ。多分南洲翁が始めて考へつた言葉ではないかと思ふ。若し他にあれば、南洲翁が取られたのであるが、兎に角南洲翁の本領は其處にある。實に正直な人であつたと思ひます。

第十二 結 論

明治時代の
衆峰中
尤も秀で
たる山

數百年來
比類なき
英雄

まだ書附た中にも、餘程略して申残したことがありますが、餘り長く申上げま
 すと、皆様も、此の狭い部屋で御退屈だらうと思ひますから、是で幾らか、南
 洲翁に就て私の申上げんとする所の一斑だけは申上げましたから、是で止め
 まするが、要するに維新の時代に於て、我が明治天皇を圍繞してゐる中に於
 て——明治天皇を中心として圍繞してゐる衆峰の中に於て、南洲翁は最も秀で
 たる所の、最も立派なる一つの山であつて。實に此れは、鹿兒島の南洲でもな
 ければ、九州の南洲でもなく、我が日本が産んだ所の數百年——敢て數千年と
 は申しませぬが、數百年來曾て其の比類を見ざる所の、豪傑的君子であり、君
 子的豪傑であつて、智徳と云ふよりも、寧ろ徳と、力とを兼ね併せたる、完全
 とは云はないけれども、完全に近い所の英雄であつて、吾々は此の人の靴の紐
 を解いても、決して恥かしくない所の英雄であると、堅く信じて疑はぬのでご

おすませ。

南洲先生 私學校綱領

道を同し、義相協ふを以て、暗に聚合せり。故に此
 理を研窮し、道義におひては一身を不顧、必踏行へ
 き事。
 王をたつとひ、民をあげれば學問の本旨。然らば
 此天理を極め、人民の義務にのそみては、一向難に
 あたり、一同の義を可立事。

明治丙子五月 日

南洲先生祭文

蓋學校者。所以育善士也。不_レ只一鄉一國之善士。必欲_レ爲天下之善士矣。夫戊辰之役。正名陷義。血戰奮闘。而斃者。乃天下之善士也。故慕_二其義。感_二其忠。祭_二之于_レ茲。以鼓_二舞於一鄉之子弟。亦所以盡_二學校之職_一也。

西鄉南洲先生終

大正十五年十一月一日印刷
大正十五年十一月三日發行
大正十五年十一月七日再版
大正十五年十一月九日三版

不許複製

西鄉南洲先生 奧付

定價金六拾錢

著者 德富猪一郎

東京市京橋區日吉町

發行兼印刷者 渡邊爲藏

東京市京橋區日吉町

印刷所 民友社

東京市京橋區日吉町

發行所 民友社

振替東京一三一〇〇

民友社出版圖書目錄

東京市京橋區日吉町
一三〇〇
振替東京

著郎一猪富德 峰蘇

史民國本日世近

二一の領本色特

◆歴史講究熱勃興
邦家前途の爲め慶賀に堪へぬ。これは『近世日本國民史』の刺戟の力、興つて大に居るとは、朝野識者が萬口一聲の批判である。

◆獨闢創造の歴史
近世日本國民史は、其の材料の精確詳審であるのみならず、成る可く前人の功を没せざる爲めに其の史實を採り用ひたるのみならず、其の歴史的人物、若くは人物に關係ある權威者をして自ら語らしめてある。併し若し國民史が、單に古書の抄寫と思ふものあらば、それは大なる見當違ひだ。國民史は著者の獨闢であり、創造である。

◆胸中の一大樓閣
著者は胸中に一大樓閣ありて、其の資料に古人を使用する迄で、この偉大なる國民史は、著者の匠心獨造である。而してこの大建築は、實に大正の御代を象徴す可き一大偉觀であるのみならず、帝國文獻の有する曠古の一大産物である。

◆特色は綜合大觀
一室には一室の用があり、一階には一階の用がある。然も其の特色は、之を綜合大觀せねばならぬ。蘇峰先生の國民史、亦如此耳。併し國民史を以て、單に世の所謂歴史と同一視するは、大なる間違だ。歴史は歴史だが、從來の歴史とは、全く其の本領、面目、趣向を異にしてゐる。眞に血の通つた活きた歴史だ。

◆時代潮流の活描
それは著者は一方に人を見、一方に勢を見。一方に心を見、而して兩者が社會を經緯して、時代の潮流に従つて動く情態を描き且つ叙し、且つ論ずるからである。これ從來の史書に見る能はざる特徴の一だ。

◆秩序的百科字彙
されば國民史は、近世日本のあらゆる寶庫だ。政治でも、風俗でも、商業でも、工業でも、農業でも、世の中の森羅萬象、殆ど悉く其の大綱大要を囊括して漏らす所がない。されば國民史を以て、秩序的の近世日本百科字彙と云ふも妨げない。

史民國本日世近

織田氏時代 篇前

織田氏時代 篇中

織田氏時代 篇後

豊臣氏時代 篇甲

豊臣氏時代 篇乙

豊臣氏時代 篇丙

本篇は近世日本國民史の最源頭をなすもので、筆を室町幕府の末期に起し、其の衰亡に止めてある。これ眞に信長の勃興より、霸業創始時代の記録である。

本篇は信長が、名實共に時代の主人公となり、銳意努力の時代を叙述したるもので、長篠戦争を始め、安土城の經營、毛利氏との關係、丹波方面の手入れ等に至る。

本篇は信長が最活動最得意の時代を叙述したもので、武田氏の滅亡、信長父子の死等を描き、最後に經世的英雄たる信長の全體を顯現したるものである。

本篇は秀吉の素生と、其の出身に筆を起し、然る後織田氏時代に接續して、秀吉の創業時代を叙述したもので、一代の英雄秀吉の立志傳と謂ふべきもの。

本篇は秀吉が五十一歳から、五十三歳に至る最も油の乗りたる期間の記録で、彼が日本統一の事業を完成の域に進めた秀吉の生涯中最得意の時代である。

本篇は秀吉の國內的政務の落著を示すもので、北條氏退治を骨子として、東北の平定、家康の移封の他に、我使節の羅馬入りの如き、奇觀として注目に値する。

製上 菊判 定價 各五圓
製並 菊判 定價 各三圓
送料 各十錢
送料 各二十錢

近世日本國史

豊臣氏 時代丁篇 朝鮮役 卷上

本篇は前人未見の史料に據り、著者の最も精力を傾注したる一で、大和民族の海外葛藤より、秀吉の外征、行長の平壤入り、其他日本軍制海權の失墜に終る。

豊臣氏 時代戊篇 朝鮮役 卷中

本篇は朝鮮役に於ける日明外交史とも謂ふべきもので、朝鮮が明の救援を請ふに始まり、明の神宗皇帝が秀吉を日本國王に封するに終り、日明兩軍の遭遇戦あり。

豊臣氏 時代己篇 朝鮮役 卷下

本篇は朝鮮役の總勘定とも謂ふべきもので、講和評定の経緯より其の實行期に入り、秀吉の死と日本軍の總撤退に至り、關白秀次の破滅秀頼の成立を叙す。

豊臣氏 時代庚篇 桃山時代概観

本篇は日本歴史に、磨滅すべからざる華麗絢爛たる文化の一時期を劃した、桃山時代の多趣多様、各種各方面に互る特色を選び、其の概観を描く。

家康時代 上卷 關原役

本篇は秀吉死後の形勢より、關原一戦に於て石田三成が家康と雌雄を決せんとして、如何に震天動地の活劇を演じたかを叙すると共に其の前後の顛末を記述す。

家康時代 中卷 大阪役

本篇は天下の名實徳川氏に歸し、遂に大阪冬陣夏陣の開始となり大阪城陥り豊臣氏全く亡ぶるの狀を叙したもので、眞に沙翁の史悲劇以上の史的興味ある讀物。

家康時代 下卷 家康時代概観

本篇は家康の人物と、其の一生の事功とを精審に叙述したもので、徳川幕府施政の根本義に始り、家康の臨終に至るまでを記述す。眞に是れ完全な家康論。

徳川幕府 上期上卷 鎖國篇

本篇は鎖國政策に關聯した内外一切の出來事を、豊富なる材料と精緻なる史筆とに因りて、論斷し叙述したもので、鳥原役の顛末等をも記述す。

徳川幕府 上期中卷 統制篇

本篇の眼目は、幕府對朝廷關係の記述で、朝幕衝突を始め、諸大名改易、親藩連枝處置の顛末の如き、最も幕府の醜惡を抉出し、一面幕政人材史を作す。

徳川幕府 上期下卷 思想篇

本篇は尊王及び國體の思想の胚胎と、發達の來歴を記述したもので、殊に水戸光圀に關しては特筆大書し、由比正雪の叛逆の顛末をも精細に叙述す。

元祿時代 上卷 政治篇

本篇は幕府が絶對威力を、如何に政治方面に實現したかを記述すると共に、綱吉公、桂昌院、堀田、柳澤等の人物を批判し、時の後光明天皇の御事をも記載す。

元祿時代 中卷 義士篇

本篇は赤穂義舉事件の記述で、單に興味中心を目的とせず、其の原因を究め、世論を批判し、獨特の觀察の下に成る眞の義士觀である。

上製 菊判 定價 各五圓
並製 菊判 定價 各三圓
送料 各八錢
送料 各二錢

上製 菊判 定價 各五圓
並製 菊判 定價 各三圓
送料 各八錢
送料 各二錢

近世日本國史

元祿時代 世相篇	元祿享保中間時代	吉宗時代	寶曆明和篇	田沼時代	松平定信時代
本篇は元祿時代に生める各方面の代表的人物と、其の業績を記述したもので、瑞賢、奈良茂、辰五郎等の實業家や、西鶴、近松、芭蕉、狩野、英、等を列挙す。	本篇は家宣、家繼の短期時代に於て、新井白石が如何に活政治を運用したかを精叙すると共に、羅馬人シドツチの渡來、江島事件等を特筆大書して概観に及ぶ。	本篇は徳川幕府に取つて、將軍政治中興の一時期たる吉宗時代の施設萬般を縦横に叙述し、居然小家康たる吉宗の人物は勿論、更に文教發達の方面をも特筆した。	本篇は桃園天皇を中心としたる、攝家對平ら公家の葛藤、竹内式部、山縣大貳の二大事件を詳述し、國典研究が自から幕府倒壞の因を醸生したるを徵象す。	近刊	續刊
上菊並製 料送定製 價料價定 各各各各 圓八三二 錢圓錢	上菊並製 料送定製 價料價定 各各各各 圓八三二 錢圓錢	上菊並製 料送定製 價料價定 各各各各 圓八三二 錢圓錢	上菊並製 料送定製 價料價定 各各各各 圓八三二 錢圓錢	上菊並製 料送定製 價料價定 各各各各 圓八三二 錢圓錢	上菊並製 料送定製 價料價定 各各各各 圓八三二 錢圓錢

蘇峰 徳富猪一郎 著

天覽台覽 久邇大宮殿下より本書 嘉稱の玉詠漢詩御下賜	國民小訓 附錄二 涵情養氣集	家庭小訓	處世小訓	國民小訓字解	家庭小訓字解	處世小訓字解
(文部省認定) 忠君愛國の護符、憲政教義の絶好讀本、眞に國民醒覺の教訓書。附錄に和歌八十首、漢詩九十絶を收む。孰れも國民の志氣を振作するの随一資糧。日夕諷誦の絶好伴侶。	改訂 (文部省認定) 家庭の實用的心得を示したもので家庭や女學校に備ふべき書。	改訂 (文部省認定) 如何にして世に處すべきかを平易に説いたもので、實に出世の好指針。	何れも出来るだけ精確丁寧に字解を附し、著者述作の精神の諒解に努む。	送價 、二五 〇二	送價 、二五 〇二	送價 、三〇 〇二
菊判並製 二四〇頁 奉仕的廉價 、八〇 、〇八	菊判並製 、五〇 、〇六	菊判並製 、五〇 、〇六	菊判並製 、五〇 、〇六	送價 、二五 〇二	送價 、二五 〇二	送價 、三〇 〇二

民友社編
輯部編纂

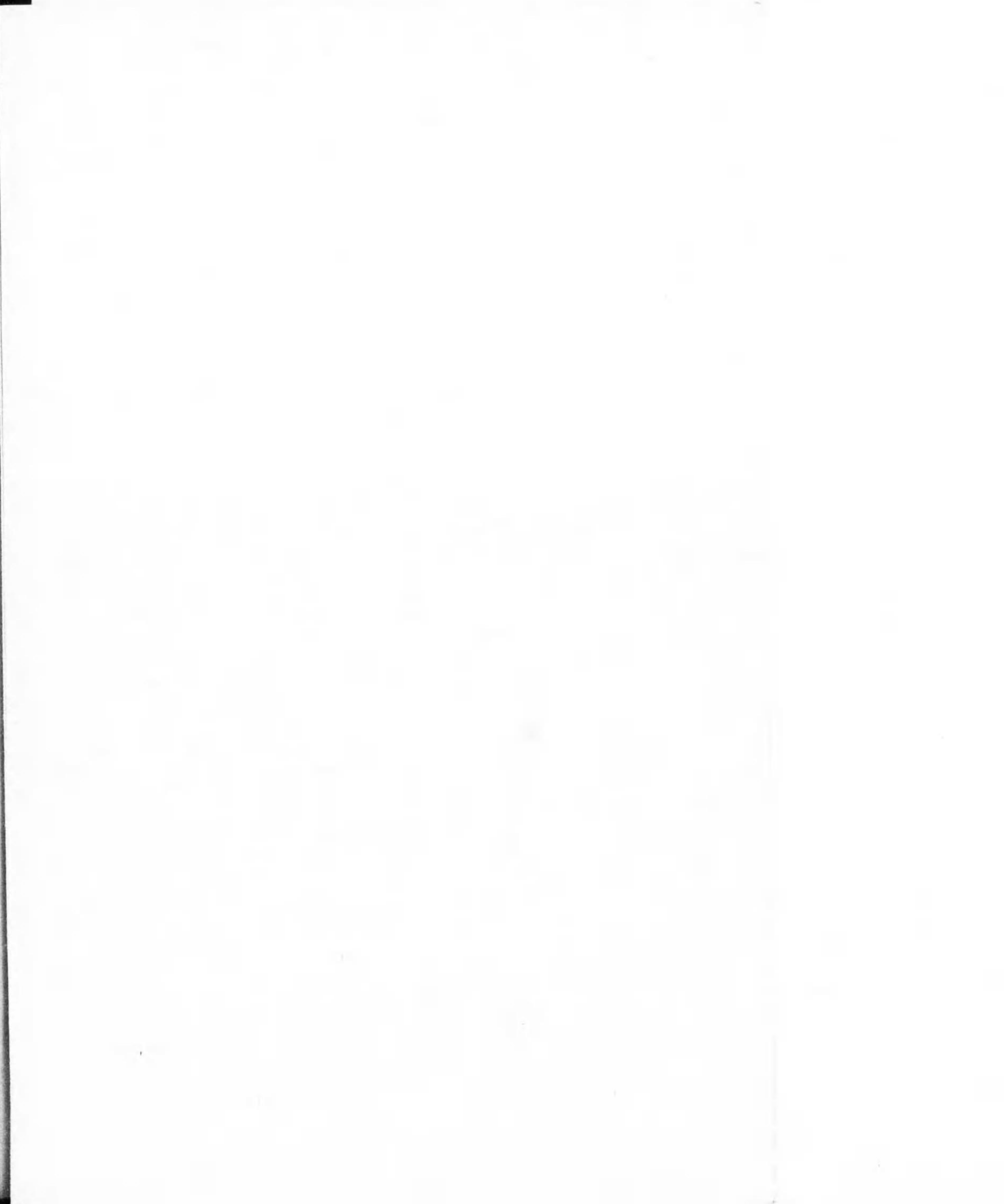
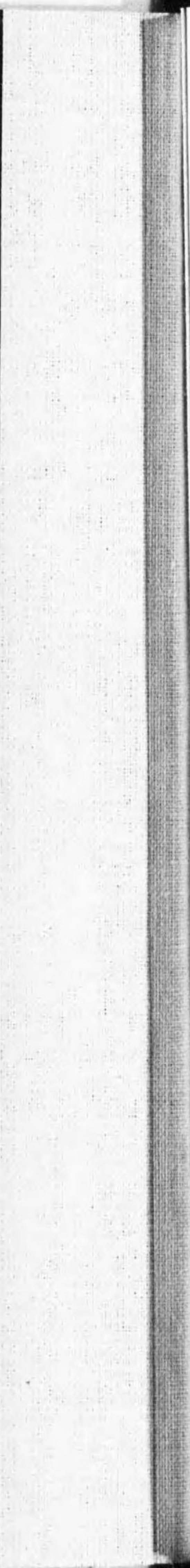
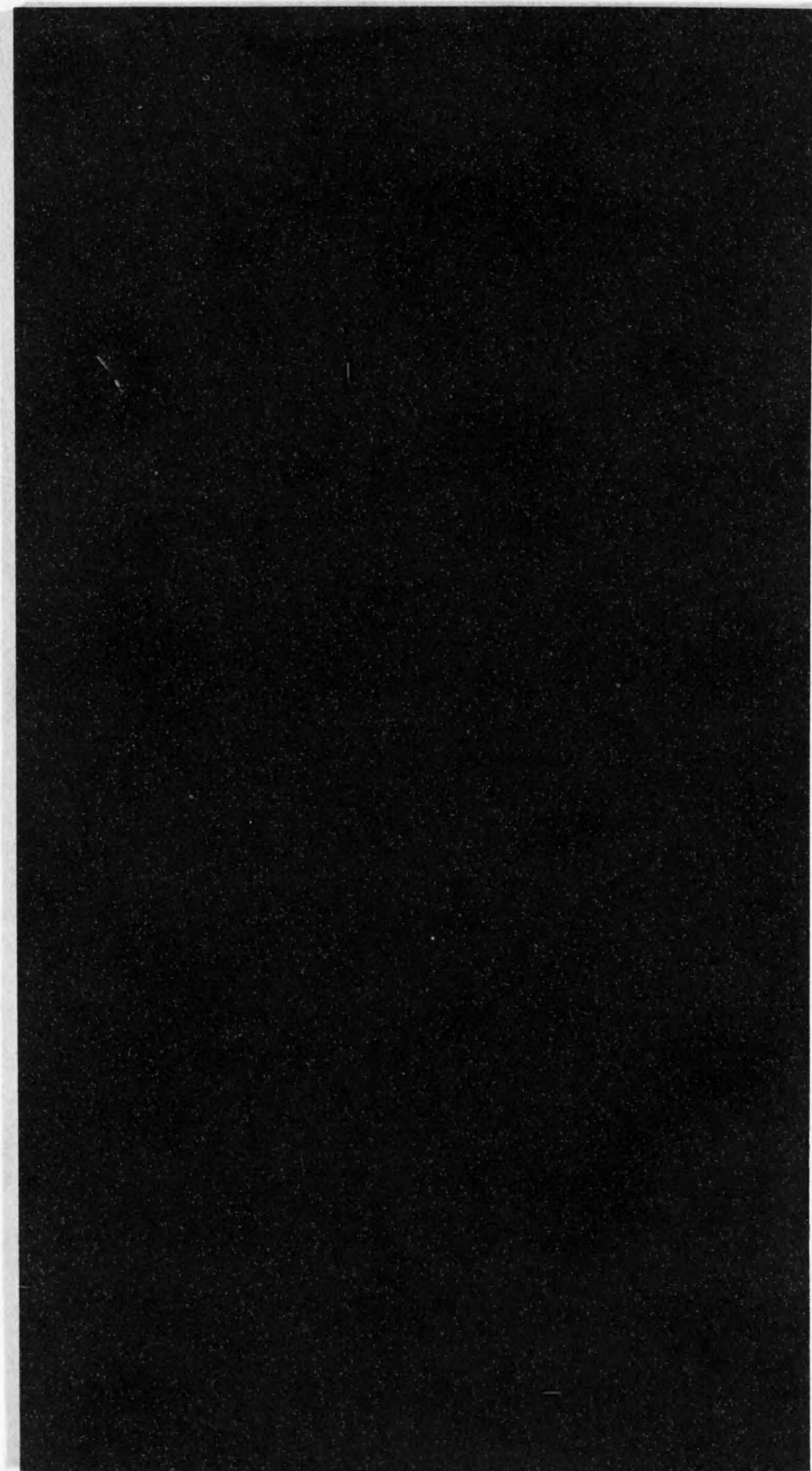
民友社小史と 出版の圖書

民友社は明治二十年二月、蘇峰徳富猪一郎氏の創立する所だ。爾來こゝに四十年、明治大正を通じて、此の如き永き生命と、しかも恒に生々不息の精神を以て、國家の進運に貢献しつゝある當業者は、他に其匹を見ない。

『國民之友』の刊行が、明治文化の促成に寄與したことは言を須たず、『家庭雜誌』を刊行して、婦人醒覺の先唱者となり、『英文極東』を刊行して、日本を世界に紹介したのも、當年の一大驚異であつた。其の出版した圖書は、蘇峰學人等身の著作を中心とし、更に政治、文學、教育、經濟等の各方面の名著を網羅し、其の種類千餘種、刊行部數は無慮千萬部にちかく、其の世教に裨益し、人文を開發したるの功績は、天下公論の存する所である。

特に大正時代に入つてからは、蘇峰學人の文章報國の一念は、愈々益々熱烈となり、幾多の名著を打出したが、就中『近世日本國民史』は、畢生の大事業として經始せられ、大正七年五月から十五年八月迄に、二十七卷を稿了し、豫定以上確實に進捗しつゝある。

5



終

